

信州大学工学部同窓会沿革史



信州大学工学部同窓会

平成22年10月



同窓会沿革史の発刊にあたり

同窓会理事長

柳沢 武三郎 (通信 31)



工学部創立 60 周年記念のために、諸事業を実行してまいりましたところ、まず念願の建物の完成をみたところであります。もう一方の記念誌発行も編集作業が終了し、発行の運びとなりました。これも一重に同窓会各位のご協力の賜物と厚く御礼申し上げます。

この機会にあたり、記念誌の重要な構成要素の一つであります、標記の同窓会沿革史を抜粋し、発行することと致しました。

本沿革史は、本会理事吉澤孝和氏(土木32)の精力的なご盡力により、かなり精緻に編纂された内容となっております。

本冊子は、母校の発展と共に、本会の諸事業が遂行されてまいりました経緯の一端をうかがえ得る内容となっております。この機会にご一読いただきます皆様に厚く御礼申し上げますとともに、編纂されました吉澤氏にあらためて感謝申し上げます。

同窓会員の皆様には、ひきつづき本会のさらなる発展のためにご協力を賜りますよう、心から念願申し上げる次第であります。

平成 22 年 10 月

信州大学工学部同窓会の沿革

【前 史】

明治から大正期にかけて我が国で設置された高等工業学校は22校である。昭和期に入り、高等工業学校増設の気運が高まり、昭和14年3月の国会でさらに7校の高等工業学校の増設が定められた。これを機に、長野県内でも高工招致運動が活発となった。昭和15年12月、長野県議会は高等工業学校設置に関する意見書を可決し、昭和16年、長野電気株式会社からの寄付金100万円を基金として運動を展開した。また長野市は、昭和17年に高工設立委員会を発足させた。そして昭和17年12月10日、閣議において長野市に長野高等工業学校を設置することが決定された。

S18・4・1 長野高等工業学校生徒募集要項公示

学科 (修業年限3年)	機械科・精密機械科・航空工学科・ 電気科・通信工学科 各科定員40名
----------------	---------------------------------------

募集人員200名に対して入学志願者は2633名

S18・5・10 第1回入学式挙行

長野工業学校(現在八十二銀行本店敷地内)の講堂で挙式、同校の一部を仮校舎として授業開始。

S18・8・21 長野高等工業学校報国隊規程作成

戦局の重大化に伴い「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定されたことを受けたもので、9月には県内各地の工場へ学科ごとに出動した。12月には報国隊として、食糧対策耕地改良事業のため、近隣の村々へ全員2週間の勤労奉仕を行った。

S18・11・1 長野高等工業学校校舎新築の地鎮祭

高工招致運動の中で、長野県と長野市は校舎および寄宿舎の用地を若里地区で買収し、国に寄付した。(右の地形図の「里若」の文字付近から南に広がる一帯)

S19・3・22 長野高等工業学校報国隊勤労奉仕に出動

決戦非常措置要綱に基づき、各学科に相応する県内外の軍需工場へ出動した。

S19・4・1 勅令165号により校名改称

長野高等工業学校を長野工業専門学校に。

S19・4・1 長野工業学校の仮校舎から旧県立長野工業試験場に移転して授業開始

かつての(長野市若里500)長野工業試験場は、現在の工学部キャンパス用地内の北西部の一帯に位置していた。この土地と建物を長野県から移管され、校舎として使用した。右の写真の大きく長い校舎の西側の建物群が当時の県立長野工業試験場である。



昭和2年当時の若里一帯の土地利用状況
(長野市所蔵 1/1万地形図)



昭和22年当時の学校の整備状況
(昭和22年に米軍が撮影した空中写真の一部)

S19・6・1 **学校報国隊出動令で学徒動員は東京方面にも及ぶ**

2年生は県内と東京方面の軍需工場へ出動、1年生は近隣の村々へ農繁奉仕に出動した。

S20・1・15 **緊急航空機増産のため1年生は富山市へ出動**

S20・3・31 **第一校舎(教室)と寄宿舎が初めて新築落成**

S20・4・1 **決戦教育措置要項により1年間授業停止**

昭和20年4月1日より、原則として授業は全面的に停止、全学徒はすべて軍需生産、食糧増産、防空防衛、重要研究、直接決戦に緊要な業務に総動員される。

S20・8・13 **長野市空襲**

米軍機約10機による波状攻撃を受ける。

S20・8・15 **終戦**

学徒勤労動員を中止。引揚げや食糧事情等のため臨時休業に入る。

S20・9・1 **授業再開**

9月1日から16日まで授業を行い、9月17、18日の両日、試験を行う。

S20・9・23 **第1回卒業証書授与式挙行**

(繰上卒業生172名)

戦時中の非常措置として、昭和17年度から修業年限を2年半に短縮し、9月卒業を昭和20年まで続けた。

S20・10・31 **第二校舎(教室)が落成**

S20・11・1 **陸海軍諸学校からの転入学**

S20・12・20 **航空機科が廃止される**

S21・2・23 **電気通信科同窓会の発会**

会を長野工専電気通信科同窓会と命名し、後日校友会誌IMPULSE Vol.1を発刊した。

S21・2・25 **第一校舎(教室)より出火し同建物を焼失**

火災から時を置かずして文部省より昭和21年度新入学生募集延期の通知を受け、学校の存続が危ぶまれた。学校当局および在學生と卒業生は焼失校舎の再建と学校の存続について文部省へ陳情すると共に広く市民に呼びかけて支援を求めた。

信濃毎日新聞記事の見出し

4/12 母校危機に直面す長野工専生の救校デモ

4/13 長野県立図書館において長野工専存続県民大会

戦時体制下の学生生活(市川肇(精機20)の日記の一部を抜粋)

S18・10・8 全校戸隠行軍を行う。この日、田村君に召集令状届く。

S18・12・12 大島島村へ勤労奉仕一週間。

S19・1・27 菅平高原でスキー訓練を行う。2泊3日。帰路、須坂口まで必死に滑降して下る。

S19・3・22 学徒動員壮行会。下村校長訓辞。一同学徒動員の趣旨を体して生産報国を誓う。

S19・3・26 校長引率で日本光学塩尻工場入り。全工員と対面。

日課：5時30分起床・点呼・宮城遥拝・故郷挨拶・勅諭奉唱・就業7時・終業18時・消灯21時。

生活：蚕室改造の寮に全員宿泊。各職場で仕事につき、空腹と慣れぬ作業に頑張る。

派遣教官による授業、教練も実施。男子職員の召集相次ぎ我等工専生の責任大。

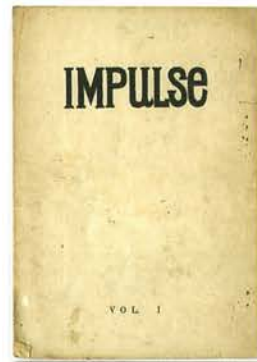
先に勤労働員された塩尻高女生と共に兵器生産に日夜専心の日々を送る。



新築された第二校舎 東側より撮影。校舎の中間の渡り廊下は北側の第一校舎につながる。渡り廊下のはるか後方には長野県から移管された旧長野工業試験場の建物の屋根の一部が見える。

8月28日、全学校に授業再開の訓令が発せられ、併せて陸海軍士官学校等の軍部関連校在學生の一般校への転入学が決定され、本校は160名の転入学を受け付けた。しかしこれに対する學生の反対が強く、学校側との対立によって休校状態が続いた。學生側と学校側の交渉により、64名の入学で合意に達したのは11月1日午後3時であった。

初の同窓会誌(長野工業専門学校電気通信科同窓会誌)



内容(A4判34ページ)

・同窓会発会式の記録

昭和21年2月22、23日 於湯田中温泉

参集者百余名 会則決議・会長挨拶・

祝辞・演説会・演芸会 総経費2,615円

・技術論文2編 随想13編

・会則・会員名簿・会員消息

記事抜粋(白井武校長の挨拶)

友よ、われらの校風たる正義の大道を邁進し、科学技術の職分を通して武備なき平和国家の建設に努め、以て世界人類和合の礎を築こうではないか。

あぐら授業：校舎の消失で授業は寄宿舎で行われた。15畳敷の部屋16室。1室に約50名の學生が入り、そこでの授業は「あぐら授業」と呼ばれていた。

S21・3・3 長野工業専門学校 校友会発足

戦時中の「校長閣下」は「校長先生」に改められ、学園民主化の進む中で「校友会」設立の気運が高まり、寄宿舎の食堂で発会式が行われた。

S21・3・7 長野工業専門学校職員組合結成
(教職員102名)

S21・4・1 航空機科廃止に伴い第二機械科を置く

第二機械科は実質的に土木科としての授業を開始した。

S21・5・2 凍結されていた新入学生募集が認可される

校舎の焼失で学校存続の危機の中での朗報。

S21・12・20 長野工業専門学校後援会設立

専門学校としての設備充実を目標に、地方各界の有力者および生徒父兄の援助を要請した。会長に小坂順造氏。

S21・12 長野工業専門学校同窓会結成

S22・4 新制大学設置法公布を機に大学への昇格運動活発化

学校当局者、後援会、同窓会は協力して単科工業大学への昇格運動を開始する。長野県出身の各界の名士への働きかけと昇格寄付金の募金を行う。



S22・10・1 財団法人民生科学研究所設置認可

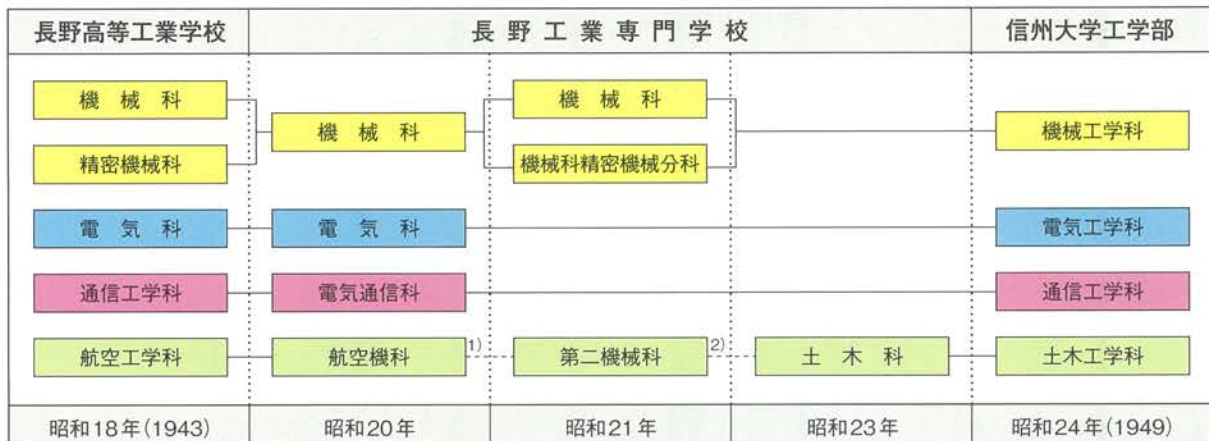
研究所のあることは、将来大学への昇格に有利との見解で財団法人民生科学研究所を設置し、設備拡充と各種委託研究に当たった。

S23・4 文部省は国立大学設置法を公布
設置法は県単位1大学設置の方針のため、長野県下の各高等専門学校は、信州大学設置委員会を組織して、信州大学総合大学案を作成した。また、知事を会長とする信州大学期成同盟会を結成した。

S23・7・1 土木科の設置が認可された

新設土木科の入学式を9月1日に挙行了。これに関連して、第二機械科は12月31日をもって廃止された。

信州大学工学部誕生までの経緯



1) 終戦で航空機科は廃止。 2) 第二機械科は実質的には土木科としての授業を行った。その後土木科の設置に伴い廃科となる。

S24・5・31 信州大学設置が認可される(法律第150号)
 本学は信州大学工学部となる

学生定員 135名	機械工学科 45名 通信工学科 30名	電気工学科 30名 土木工学科 30名
--------------	------------------------	------------------------

S24・7・12 信州大学工学部第1回入学式挙

S24・9・23 裾花川堤防の決壊で水害を受ける

S25・6・27 工学部学生会を結成し、長野工業専門学校校友会と活動を共にした

S25・10・1 長野工業専門学校同窓会報第1号発行

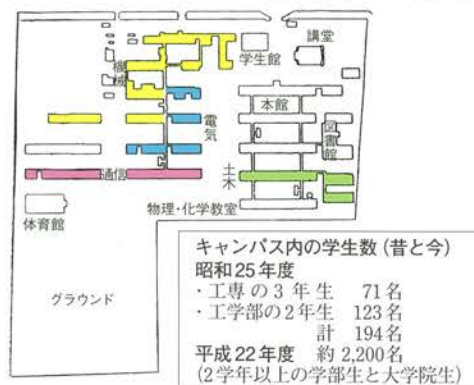
長野工業専門学校は信州大学長野工業専門学校として併設された。

台風による豪雨で裾花川の堤防が決壊。氾濫水が若里一帯を襲う。工事中のグラウンドは湖と化す。寄宿舎と官舎2棟が床上浸水。

学生会は工学部全学生で組織し、学生総会、学生委員会、協議会が設置された。協議会は学校当局と学生会のパイプ役となる。

昭和25年当時の建物配置図

建物はすべて木造で平屋か二階建。白ヌキは共通建物。



S25・10・30 開学1周年、学校創立7周年記念式典挙

開学記念文化祭がこの日を中心に5日間行われた。これを機に毎年恒例の大学祭がこの時期に行われている。

S26・3・15 長野工業専門学校最終卒業式
 開校後第6回の卒業式、卒業生総数は累計982名

S26・3・31 長野工業専門学校は廃校となる



校章入りの記念バックル



正門の門柱



門柱の校名

S27・3・25 通信工学科音響実験室落成

S27・11・21 電気工学科高電圧実験室落成
 土木工学科実習室落成

S28・3・15 信州大学工学部第1回卒業証書授与式挙

S28・3・31 信州大学附属図書館工学部分館新築落成

S29・3・15 信州大学工学部同窓会が結成される
 名称を「信州大学工学部同窓会」とする。

S29・3・31 講堂新築落成(延224坪 建築費598万円)

S30・3・15 工専・工学部同窓会合併
 これにより新たな信州大学工学部同窓会が発足した。同窓会の名称を広く会員に募集したところ「若里会」に選ばれていった。そして10月には会報「若里」創刊号の発行に至る。

S30・4・1 信州大学工学部同窓会会則が施行される

信州大学工学部同窓会会則(要約)

目的:会員相互の親睦を図り、併せて工業の発展に資する。
 正会員:長野工業専門学校及び信州大学工学部卒業生。
 特別会員:信州大学工学部在職中の教員と会の推薦者。
 会長1名:信州大学工学部長
 副会長2名:理事会で正会員中より推薦し会長が委嘱。
 理事:同期正会員中より各科1名、特別会員中より若干名。
 常任理事:理事中より互選し会長が委嘱。
 監事:2名:正会員中より互選。
 任期:役員任期は2年で重任を妨げない。
 總會:原則として年1回開催し重要事項を決議する。
 会費:入会の際金1,000円を納入する。(終身会費)

S30・6・12 同窓会東京支部結成(東京地区参加人員46名)

S30・9・3 同窓会中部支部結成(松本地区参加人員19名)

S30・10・20 信州大学工学部同窓会報「若里」創刊号発行



若里寮のコンパ風景



犀川河川敷からの若里寮の全景

北アルプスの峰の雪…厚の河原に立ちて聞く…
若里寮の「青春讃歌」を思い出す。腕に長タオル・素足に下駄履の学生服姿は当時の学生たちの典型的なスタイルだった。

昭和30年10月20日

若里

本校は全学生を以て、長野工業専門学校とし、長野並びに地元長野野市の機業界に多大なる御寄与の下に、信州大学工学部として、創刊号は約千三百冊の多量に達し、創立歴史が浅いにもかかわらず、本誌の刊行に際しては、その歴史を十分に踏襲し、内外にわたるこの数年間に渡り、関係者等も御寄与され、各方面に有為の技術者として活躍され、我が国工業界に寄与されつつあることは、この上なく、誠に喜ぶべきである。よりわけなく、大学の区別なく、真に、一帯となつて協力しあい、うるわしい情義が結ばれて、いかにことばしばしば見られるにつれ、限りない感謝をさへせざるを得ない。

同窓会の前線は、各々の職務を果敢と、より光輝でなく、同僚互いに協働し、知識の交換に大なる役割を果し、それらひいては工業技術の進歩に貢献することにおいて、いままでもいと不届きである。その意味において、本誌の発行は、大いに望まれるべきである。この創刊号は、同窓会報として、大いに望まれるべきである。この創刊号は、同窓会報として、大いに望まれるべきである。

野原並びに地元長野野市の機業界に多大なる御寄与の下に、本誌の刊行に際しては、その歴史を十分に踏襲し、内外にわたるこの数年間に渡り、関係者等も御寄与され、各方面に有為の技術者として活躍され、我が国工業界に寄与されつつあることは、この上なく、誠に喜ぶべきである。よりわけなく、大学の区別なく、真に、一帯となつて協力しあい、うるわしい情義が結ばれて、いかにことばしばしば見られるにつれ、限りない感謝をさへせざるを得ない。

この機会に厚く御礼を申し上げます。

左記役員が務めてきた後には、各役員各位が官民の厚意に倣い、よく日夜設備の充実と努力され、予望の不足を補うために、後進の御礼と自ら設備の製作に当たるなどの苦心は、大いに御礼申し上げます。

なにより、本校の発刊に際して、本誌の刊行に際しては、その歴史を十分に踏襲し、内外にわたるこの数年間に渡り、関係者等も御寄与され、各方面に有為の技術者として活躍され、我が国工業界に寄与されつつあることは、この上なく、誠に喜ぶべきである。よりわけなく、大学の区別なく、真に、一帯となつて協力しあい、うるわしい情義が結ばれて、いかにことばしばしば見られるにつれ、限りない感謝をさへせざるを得ない。

若里
創刊号

発行所
長野県若里500
信州大学工学部同窓会

印刷所
長野県長野市
柳沢印刷所

発行人
石橋勇一

信州大学工学部同窓会報「若里」創刊号

B5判新聞形式12ページ

内容：入学生氏名、卒業生氏名、教室便り、支部便り、
会員便り、学校便り、役員名簿、会則

S31・4・1 信州大学工学部後援会設立

S31・5・19 同窓会に同窓生から初の副会長が選出される

理事会において市川誠(精機20)と菱田拓郎(電28)を推薦し、決定した。

S31・10・15 同窓会報「若里」第2号発行
若里第2号からA5判の製本となる。編集内容も74ページの充実したものとなる。

S31・11・5 信州大学工学部学生自治会結成
昭和25年に結成された工学部学生会は、この日から信州大学工学部学生自治会として新規約の下に活動を始めた。

S32・3・31 同窓会関西支部設立準備会(参加人員18名)

S32・11・4 同窓会南信支部発会(参加人員51名)

S32・11・10 同窓会東信支部発会(参加人員43名)



目的：全学生の福祉の向上と自由で明るい民主的学園の建設
構成：工学部全学生
機関：学生総会・議長団・学生委員会・評議委員会
選挙管理委員会・サークル協議会

S32・12・27 **正門東側に学生ホール新築**
木造平屋 一部二階建 延73坪
建築費222万円は地元の寄付による。

これまでは改造した教室で食パンや文具の販売のみだったが、新築されたホールの一階は食堂にも利用され、学生も教職員もいくつかの献立で昼食ができるようになった。

S33・6・27 **体育館が新築落成**
鉄骨平屋 一部二階建 延171坪
建築費615万円は地元の寄付による。

昭和18年の開校以来、教室と実験研究棟が先決であったが、図書館(S28)、講堂(S29)、学生ホール兼食堂(S32)、体育館(S33)が整備され、学園らしい風格が見えてきた。これらの施設は地元の支援によるところが大きい。

S33・7・8 **同窓会関西支部設立**(参加人員23名)



学生ホール(左) 図書館(中) 講堂(右)



野球場バックネット(左) 体育館(中)

S34・3・31 **工業化学科の新設認可**(学生定員40名)
教官定員:教授4名、助教授4名、助手4名

昭和31年から続けられてきた運動(県議会・県内諸団体)によって実現。工学部としては初めて規準通りの教官定員をもつ4講座制の学科が誕生した。

S34・4・1 **工学専攻科の設置認可**
学生定員:機械・電気・通信・土木 各5名

大学卒またはこれと同等以上の学力を認められた者に対して特別の事項の教授と研究指導を行うもので、修業年限は1年以上。

S34・10・11 **同窓会東海支部結成**(参加人員39名)



S35・4・21 **工学専攻科第1回入学宣誓式**

S36・3・20 **工業化学科建物第一期新築工事成**
工学部初の鉄筋コンクリート三階建ての建物であり、これに加えて工学部として初めてのガスの施設が備わった。

東京ガスの導管は遠方の国鉄長野工場までしか配管されておらず、大学当局は数年前から県と市の協力の下にガス導管延長の運動を続け、ようやく実現に至った。

S36・5・13 **同窓会北信支部設立**(同窓会総会の当日)

S37・4・1 **精密工学科の新設認可**(学生定員40名)
昭和35年度から続けてきた4講座制学科新設の運動が実現した。

同窓会会則の一部変更

S36.5.13 総会決議

- ・会の目的に「母校の後援」を追加。
- ・入会金1,000円で終身会費としていた従来の会費を廃し、入会金1,000円、年会費200円に改める。

S37・4・1 **工学部生活協同組合設立**

国の施設を利用する管理規定の変更により、学生および職員を含めた工学部生活協同組合を設立して、学生ホールを全学部の福利施設として運営することになった。

S38・4・10 **工学専攻科工業化学専攻設置認可**
(学生定員5名)

同窓会会則の一部変更

S38.11.2 総会決議

- ・理事は同期正会員中より各科1名を1名以上に、常任理事は各科理事中より1名以上に改める。

S38・11・1 **長野工業専門学校
創立満20周年記念式典挙行**
昭和18年の開校より満20周年を記念して、同窓会は信州大学工学部および学生自治会と共催で、記念式典、記念講演会、祝賀会を行った。記念講演会では初めて2名の同窓生が講演した。

S39・4・1 **土木工学科の拡充改組認可**
これまでの4学科目制(学生定員40名)が6講
座制(学生定員60名)となる。

S39・4・30 **精密工学科建物新築工事落成**

S39・12・15 **電気工学科建物新築工事落成**

S40・2・28 **信士会設立**

S40・9・18 **若里会関東支部総会**

S40・11・3 **創立25周年記念事業会結成**

S41・4・11 **土木工学科建物新築工事落成**

S41・4・22 **工学専攻科精密工学専攻設置認可**
(学生定員5名)

S41・5・6 **信州大学初の電子計算機室が工学部に設
置され開所式(鉄筋コンクリート平屋建)**

S41・7・13 **戸隠山荘用地の登記完了**
25周年記念事業実行委員会は用地を戸隠村営
スキー場の近くに定め、この日登記を完了した。
場所 長野県上水内郡戸隠村越水
面積1360㎡(412坪)
購入価格68万円

S41・8・4 **学内会員が戸隠山荘用地の境界杭と看
板を設置**

講師と演題

伝田精一(通29):最近の半導体エレクトロニクスの進歩
南沢宣郎(機20):最近のデジタルコンピュータの現状

学生募集定員は6学科270名に達した。当時の工学部の陣
容は全教職員数150名余(講師以上の教官60名)であった。

工学部2番目の鉄筋コンクリート三階建実験研究棟

工学部3番目の鉄筋コンクリート建、1部は四階建



土木工学科では発足の当初か
ら、学年をこえて学科新入生
の歓迎会、夏季実習報告会、
卒業送別会を続け、毎年1月2
日には教官と卒業生有志の新
年会を恒例としてきたが、昭
和40年の時点で卒業生も403
名に達し、「信士会」の名のも
とに会として正式に発足した。
ちなみに昭和40年の若里会正
会員数(卒業生総数)は2,702
名に達した。

関東支部総会はこの日、第6回目を迎えた。正会員は200
名余り、大学側からは6名の出席で大盛会となった。

25周年を翌年に控え、若里会は記念事業として戸隠高原
に山荘を建設することを総会で決定し、募金活動を始め
た。これと呼応して学校側は25年沿革史発刊のための調
査・編集に取り組む。

鉄筋コンクリート四階建実験研究棟および鉄骨平屋実験棟



戸隠村越水地籍に建てられた若里会用地の看板前で記念撮影



境界杭の埋設作業

S41・12・10 機械工学科建物新築工事竣工
東棟:鉄筋コンクリート三階建
西棟:鉄骨平屋建

S42・1・14 同窓会北海道支部結成

S42・3・10 機械工学科実習工場竣工(鉄骨平屋建)

S42・3・31 信州大学大学院工学研究科の設置認可
学部当局は昭和40年2月に大学院設置促進委員会を設立して大学院工学研究科(修士課程)の設置に向けて教官組織、研究、施設設備を強化してきた。また、県経営者協会が大学院設置期成同盟会をつくり、促進に協力した。
この努力が実を結び、昭和42年4月1日から修士専攻の2年課程を開設することが認可された。
学生定員(総員50名)
機械工学(10)・電気工学(8)・通信工学(8)
土木工学(12)・工業化学(8)・精密工学(8)
これに伴い、従来の専攻科(各科定員5名)は廃止された。

S42・5・27 大学院工学研究科の第1回入学宣誓式

S42・8・10 戸隠山荘の起工式を現地で行う

S42・11・1 信州大学工学部25年略史刊行

S42・11・2 信州大学工学部25周年記念講演会

S42・11・3 信州大学工学部25周年記念式典

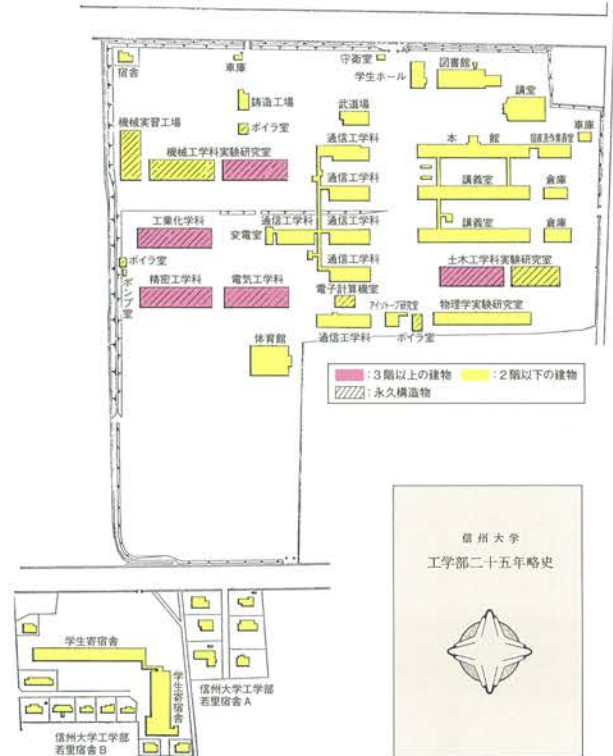
S42・11・4 戸隠山荘落成祝賀
工学部から貸切バスで約50名参加。竣工した山荘を見学後、戸隠スキー場の川中島バス(株)経営の高原ホテルのレストランで祝賀会を行う。

43・4・1 若里会初代理事長に市川誠就任
(精密機械20年卒)

25周年を契機として、若里会の完全な自主性を確立するために会則の変更がなされ、同窓生の中から理事長を選び、工学部長は名誉会長に推薦することとなった。

S43・4・1 合成化学科設置認可(学生定員40名)

25周年当時の信州大学工学部建物配置全体図



竣工した若里会戸隠山荘(木造二階建延44坪)

25周年記念事業決算の一部		募金者 2,517名
収入	同窓生の寄付金と利息	9,850,998円
支出	土地購入代(412坪)	680,000円
	山荘工事費(延44坪)	6,286,910円
	山荘備品	1,406,140円

若里会会則の変更点

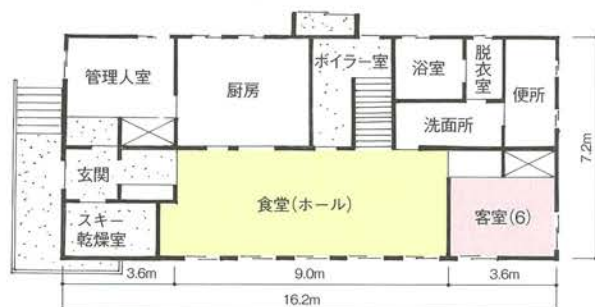
- 評議員：同期正会員中より各科1名を互選、特別会員より若干名。
- 理事：正会員の中から評議員会が選出し、その中から理事長1名、副理事長1名を選ぶ。
- 名誉会長：信州大学工学部長の職にある者を名誉会長に推薦。(これまでは会長として信州大学工学部長を推薦していた)

4講座制の学科として認可された。

S43・6・1 戸隠山荘開館

信州大学開学記念日にあたるこの日に、信州大学工学部同窓会の「若里会戸隠山荘」が開館した。発足当時、山荘の寝具類は整っていたが、食事は近くの高原ホテルからの仕出しでまかっていた。初年度の夏場の利用客は250名であった。冬場に向けて山荘

の入口部分をスキー乾燥室に改造し、暖房および厨房設備を備え、食事は管理人がまかなうことにした。冬場(翌年3月末)までの利用客は780名、初年度の利用客は夏冬合わせて1,030名であった。



戸隠山荘 1階平面図



戸隠山荘 2階平面図 (洋間を日本間に改造後の間取り)



2階からの戸隠山



補修を終えた戸隠山荘 (平成 14年)



1階ホール兼食堂

○若里会戸隠山荘39年間のあゆみ

若里会戸隠山荘は、母校創立25周年の記念事業として会員の熱き思いを結集させて実現した、信州大学工学部同窓会の歴史上銘記すべき大事業であった。

戸隠スキー場から300mという立地条件にある戸隠山荘は、開館当時、他の宿泊施設としてはスキー場に隣接する高原ホテルのみであった。山荘の利用料金は1泊2食付で夏季1,000円、冬季1,100円と、ホテルに比べて格安で、大勢の利用客でにぎわった。初年度の利用客数は1,000名台であったが、年ごとに増加して、昭和47年度には2,100名台の最大記録に達した。

一方、当時のスキーブームで、スキー場の近くにはいくつもの宿泊施設が年々増えていった。これにつれ、利用客数は昭和55年度は800名台に急減、昭和60年度には地附山地すべりによる戸隠パドラインの崩壊が影響して300名台に激減、その後も低迷状態が続き、平成8、9年度は200名以下に落ちこんだ。

この事態に対して理事会は経営方針を大幅に改革した。その結果、平成11年度以降の利用客数を600名台まで回復させることはできた。しかし施設自体の老朽化が年々激しく、維持管理も困難を極めるようになったため、経営を断念し、平成16年3月末日で閉館とし、36年間の営業で2万名以上の利用客でにぎわった戸隠山荘は経営の幕を下ろした。

そして平成19年10月20日、思い出のこもる戸隠山荘に同窓会役員が参集して降棟式を行い、10月下旬に山荘を解体撤去して用地を整地し、通算39年間にわたり若里会のシンボルでもあった戸隠山荘は姿を消した。現在は「信州大学工学部若里会用地」という標識だけが残っている。

ホールを飾っていた大座法師池の絵画(杉山璋夫氏(土木22年卒)寄贈)と山荘の看板「若里会戸隠山荘」は大学に持ち帰り、大切に保管されている。

S43・6・8 信州大学工学部教職員組合結成

S43・10 工学部学生自治会が無期限ストに突入

大学の自治と管理運営をめぐる、昭和41年から全国的な規模で学生運動が広がっていった。工学部学生自治会は昭和41年10月末から11月初旬にかけて授業を放棄して学生集会を行い、大学側との団交(団体交渉)を続けた。工学部学生によるストはこれが最初にして最後のものとなった。

S44・7・1 工学部将来計画委員会規則制定

大学の管理運営に関する改革の一つとして、教官委員、職員委員、院生委員、学生委員で構成される委員会を発足させた。しかしその後は学生自治会の活動は停滞して学生委員の選出は次第に困難となり、昭和59年にはこれにかわる将来構想委員会が発足した。

S45・3・10 合成化学科建物新築落成

鉄筋コンクリート四階建

S45・4・1 通信工学科から電子工学科への改組拡充

従来の通信工学科を拡充改組して、電子工学科に名称変更し、6講座制とした。学生定員は40名から60名に増員した。

S46・3・15 附属図書館工学部分館新築落成

鉄筋コンクリート二階建

S47・3・21 工学部本部及び電子工学科棟竣工

鉄筋コンクリート六階建

S47・4・1 大学院工学研究科修士課程合成化学専攻増設

1・2階：本部管理棟 3・4・5・6階：電子工学科
学生定員8名。これにより修士専攻課程は7専攻で全学生数は58名となる。

S47・4・1 若里会第二代理事長に柄沢幸二就任

(精密機械22年卒)

S47・6・10 若里会会則を改訂し終身会費制を導入

[終身会費]

正会員は入会の際、入会金として金1,000円を納入し、会費として年額金500円を納入するものとする。ただし終身会費は金10,000円を納入するものとする。

昭和47年までの会費納入後は、金10,000円を納入して終身会費扱いとした。

S48・6・16 若里会理事会決定事項

- (1) 常任理事制を設けた。
- (2) 学部から借用した部屋を同窓会の事務所として整備することとし、他大学の実例等を参考にして進めることとした。
- (3) 戸隠山荘の洋間を日本間に改造して収容人員を増やすこととした。

[常任理事]

急を要する案件を処理する制度として、数名の常任理事を地元の理事から選ぶ。人選は理事長に一任する。

○同窓会のあゆみ：事務処理と事務室

同窓会が発足した長野工専時代、社会人となったばかりの卒業生に代わり、学校側が同窓会の運営をしていた。すなわち同窓会長は校長、役員は事務長と関係係長という体制であり、この形態は昭和30年に信州大学工学部同窓会会則が施行された当時まで続いた。

昭和31年、同窓生から初の副理事長が選出された頃から、同窓会の事務を学内の同窓生が少しずつ分担するようになった。ところが各分担者が個々に関連業務の書類を保管する状態が10年近く続き、資料の保存も困難であった。

学内同窓生の数も次第に増えて相互の協力体勢も整うにつれ、同窓会は昭和38年に創立満20年記念式典を学部と共催で開いた。

そして昭和40年からは創立25周年記念事業会を発足させ、若里会は工学部から独立した形で募金活動に取り組んだ。この時から同窓会は事務担当の職員を1名雇用して教官研究室の一角を借りて同窓生の教官と同室で事務を行った。そして戸隠山荘の建設が実現した。

その後、電子工学科三階演習室の一部をカーテンで仕切って事務室として借用したが、部屋の利用をめぐる学料と同窓会との間で不都合な面も多く、このことが母校創立35周年記念事業としての同窓会館建設の運動を呼び起こしたとも言える。

同窓会館建設の募金活動の結果、会館の用地は順調に取得したものの、その後は応募金額が建築費の目標額に達しないままの状態が長く続き、結果的には電子工学科に居候のような事務室の形態が約四半世紀も続いた。

そして先年、本館兼電子工学科の建物の耐震補強工事のために約1年間、事務室を太田記念館の一室に移したのち、平成20年からは本館2階の一室でせまいながらも事務室らしい部屋で仕事ができる状態となった。

創立60周年記念事業として、同窓会は大学と協同で信州科学技術総合振興センター (SASTec) の建設を企画した。この事業に当たっては、これまでの会館建設に寄せられた同窓生の募金をその費用に含めると共に、新たに募金活動を行って所期の目的を達成することができた。

そして平成22年3月、竣工したSASTecの二階の広々とした一室に立派な事務室・応接室・会議室兼用の部屋を確保することができたのである。

同窓生の手で同窓会の事務を行うようになった昭和40年から数えて45年、これまでに同窓会の事務担当者は5代目となった。そして年々同窓生の数が増加する現状に対処するため、3代目からはさらに1名の補助員を加え、現在は事務員2名の体制でとり組んでいる。

○戸隠山荘発足当時の盛況と部屋の改造

昭和43年6月1日、信州大学開学記念日に合わせて若里会戸隠山荘は開館して営業を開始した。山荘の建設に全力を傾注した同窓会は資金的にも苦しい状況下で、山荘の経営という未経験の試練に直面した。当時の同窓会役員は強い意志と固い協力でこれに立ち向った。会員への呼びかけと共に、職場の研修会や東京方面の他大学への働きかけが効を奏し、

利用客の数は昭和43年度は1,000名台、44年度1,300名台、45年度1,500名台、46年度2,000名台、47年度2,100名台という盛況であった。しかし間取りが洋間方式のためにスペース的に余裕がなく、せっかくの申込みも断わらざるを得ない事態も生じた。これの打開策として洋間を日本間に改造して収容人員の増加をはかった。

S48・11・9 35周年記念事業に向けた胎動

若里会評議員会で同窓会館建設と会の法人化について提案がなされた。

母校創立以来30年の星霜を経て、同窓生の数は5千名以上に達したにもかかわらず、正式な事務室もない現状に対して「35周年記念事業で同窓会館を」という声が高まり、具体化を理事長が企画することを決定した。また会の法人化に関して調査を始めることとした。

S49・1・31 工学部電子計算機センター新築落成

鉄筋コンクリート二階建

S49・3・20 「若里会」を「信州大学工学部同窓会」に変更

S49・4・1 情報工学科設置 (5講座・学生定員50名)

既設の大学院修士課程の情報処理講座を母体として数年前から申請を続けていたものである。

S49・4・1 大学院工学研究科修士課程通信工学専攻を電子工学専攻に改組

S49・6・12 同窓会館建設研究委員会発足

理事長から10名の委員が委嘱され、研究審議に着手した。

S49・8・1 同窓会報を新聞形式に変更

これまでのA5判で冊子形式の会報「若里」を見開きB3判の新聞形式の会報「わかさと」に変更し、これまで年1回の発行を年4回発行の計画で発足した。この年は理事の増員も行い、35周年記念事業の実現に向けて会員の協力を結集することを目標とした。そして郵送料の安い新聞形式を採用した。

S49・9・21 工学部35周年記念事業として、同窓会館の建設事業が定期総会で承認された 建設予定地を工学部敷地に隣接する姫塚の横に決定した。

S49・12・6 工学研究科大学院学生会規約制定

S50・1・24 35周年記念事業準備委員会発足

同窓会館建設の募金趣意書案の作成に取り組む



会報わかさと第3号 (昭和50年3月16日発行)
同窓会館建設募金趣意書 (案) と会館完成予想図

S50・3・16 新入会員歓迎祝賀パーティー復活

全学科の卒業生が一堂に会し、卒業と同窓会への入会を祝う卒業式後の祝賀会は、長い間恒例化していたが、昭和40年代に全国的な拡がりを見せた学生運動や学園紛争が尾を引き、昭和46年以降は中断の止むなきに至っていた。この祝賀パーティーは50年から復活し、体育館に新卒業生のほぼ全員にあたる三百数十名と教職員および同窓生が集まり、総勢四百名以上で卒業を祝った。



体育館で開かれた祝賀パーティー (昭和50年3月16日)

S50・4・19 同窓会館建設実行委員会発足

- ・趣意書と募金要項が決定され、会館の建設に向けて行動を開始した。建設費を4千万円と見積り、これを同窓会員の寄付金(1口5千円・2口以上)でまかなうこととした。
- ・全理事を実行委員にあて、業務を、募金推進・連絡調整・建設・支部対策・事務として委員が分担することとした。
- ・趣意書と計画概要・払込用紙を4月末から会報と共に各会員あて発送することとした。

S50・11 情報工学科実験研究棟新築落成

鉄筋コンクリート六階建

S50・11・15 戸隠山荘委員会設置

理事の中から数名の委員を選び戸隠山荘の管理運営に当ることとした。

[当時の山荘利用案内]

開館期間 冬季 12月、1月、2月、3月
夏季 7月20日～8月20日

利用料金(1泊2食付)

同窓会員 …… 2,200円
一 般 …… 2,400円
在 学 生 …… 2,100円
子 供 …… 1,600円

【開館5年目頃の戸隠山荘利用客のノートより】

昭和48年1月19・20日

全員が彼女を求めて戸隠へやって来たが、山荘では右を向いても野郎、左を向いてもしかり、本当に残念。工学部の人間は頑張らなくてはダメダ!!

(工学部院生会スキー、Y)

昭和48年3月25～27日

子供達を連れて戸隠山荘に訪れた。今日一泊して明日は家内と交替だ。静かなしゃれた佇いで全く気に入った。だが時折断水するのは残念だ。ふと若里寮で過ごした学生時代がなつかしく思い出される。

(28年卒、Y)

S51・3 工学部放射性同位元素(RI)研究室新築落成

鉄筋コンクリート平屋建

S51・3・25 工学部学生食堂新築落成(鉄骨平屋建)



竣工した学生食堂全景

バックの建物は土木工学科(前)と電子工学科(後)

S51・4・1 会則の一部を改め年会費は500円から1,000円に

信州大学工学部同窓会 会則 第6章会計

第16条 正会員は入会の際、入会金として金1,000円を納入し、会費として年額金1,000円を納入するものとする。ただし終身会費は10,000円を納入するものとする。

S51・8・31 同窓会館建設募金運動中間報告

建設予定地を工学部と姫塚の間の空地に定め、土地購入の交渉に入る。

S52・11・24 同窓会館建設予定地の土地購入が成立し登記を完了

土地面積 165㎡
購入代金 379万円



購入当時の同窓会館建設予定地(姫塚の横)

若里キャンパスの北西部に隣接する土地。写真の右端に姫塚の樺の大木が、左端には工学部の桜の木が写っている。写真の中央部の草地在購入した土地で現在は駐車場に利用している。

S53・4・1 大学院工学研究科修士課程に情報工学専攻を設置	学生定員8名。これにより修士専攻課程は8専攻で全学生数は68名となる。
S54・3・22 工学部学生寄宿舍「若里寮」新築落成	鉄筋コンクリート四階建。旧若里寮は昭和20年3月に建てられた木造二階建の寄宿舍で、老朽化が激しく、松代群発地震の時に突っかい棒で倒壊を防いでいた危険度の高い建物であった。工学部は昭和44年に新寮建設委員会をつくり、計画を文部省に申請した。昭和48年には県学生自治連合でも県議会に請願して長野県議会はこれを採択した。このような経緯を経て、昭和54年によく新築落成した若里寮の入寮対象者は工学部専門課程の男子学生で、入寮定員は80名である。
S54・4・1 第三代理事長に宮澤脩就任 (機械24年卒)	
S54・4・2 会則第16条を改め会費を大幅に値上げ	<p style="text-align: center;">信州大学工学部同窓会会則 第6章会計</p> <p>第16条 正会員は入会の際、入会金として金2,000円を納入し、会費として年額金2,000円を納入するものとする。ただし終身会費は30,000円を納入するものとする。</p> <p>付則 本会則は昭和54年4月2日より施行する。</p>
	<p>この値上げは昭和54年1月20日の同窓会総会で決議された。通信費・印刷費・事務費の値上げによる経費の上昇に加えて会員数は約6,000名に達したにもかかわらず、年会費納入者は数百名という状態が何年も続き、昭和50年前後の会計は赤字寸前であった。理事会は数年前から財政委員会を組織して検討を続けてきたが、同窓会の基金と考えていた終身会費を食い込むような現状の打開策として値上げに踏み切った。また、卒業祝賀パーティーを機に、入会金の卒業時回収に学内同窓生が努力を始めたのもこの頃からである。</p>
S54・10・1 同窓会館建設募金運動中間報告	<p>収入：募金総額15,326,500円(募金者総数1,575名) 支出：土地取得3,791,800円 諸経費897,484円 差引：10,637,216円</p> <ul style="list-style-type: none"> ・募金額が当初計画の三分の一程度で、会館建設はむずかしい状況ではあるが、理事会は、重要な企画の実現に向けて長期戦の構えで、会報「わかさと」13号を通じて同窓生の協力を呼びかけた。
S55・10・20 同窓会館建設募金運動中間報告	<ul style="list-style-type: none"> ・会報「わかさと」15号を通じて、事業開始以来昭和55年8月末現在の募金者全員の氏名と募金額を公表した。 ・同窓会館建設の募金総額は昭和55年8月末の時点で1,600万円余、募金者数は1,681名で停滞している。これまでの土地購入費、印紙代、登記料、固定資産税を差し引いた現金残高は1,200万円余である。 (問題点1) 期待される会館の建設にはこの3~4倍の資金を要する。 (問題点2) 完成後の会館維持費は同窓会の会計では無理。会館自体が収入を上げ得る事業があるのか。現在、戸隠山荘の経営だけでも大変苦労している。 ・このような現状を報告し、会員各位に改めて問題を提起して御意見を賜りたい。

S55・12・20 氷河期の始まった戸隠山荘

戸隠山荘利用客の変動

種別 年度	利用 人員	学生	会員	非 会費	子 供	教 官
51年度	1,472 名	154名 10.5%	313名 21.3%	869名 59.0%	136名 9.9%	0名 0%
52年度	1,286 名	261名 20.2%	291名 22.6%	618名 48.0%	110名 8.5%	6名 0.4%
53年度	917 名	163名 17.7%	162名 17.6%	522名 56.9%	67名 7.3%	3名 0.3%
54年度	739 名	362名 48.9%	160名 21.6%	144名 19.4%	62名 8.3%	11名 1.4%
合 計	4,414 名	940名 21.2%	926名 20.9%	2,153名 48.7%	375名 8.84%	20名 0.04%

戸隠山荘発足後5年目の昭和47年度の年間利用客は2,100名台を記録した。これをピークに利用客は急減していく。ちなみに昭和54年度の宿泊客739名の収入は206万円余であるが山荘関連支出の決算額は278万円余で72万円ほどの損益を生じている。この出費は年ごとに増加していく。そして止むを得ず利用料金を値上げすることが数年ごとに繰り返されていく。

S56・3・16 会報「わかさと」は第17号にて形式変更

「わかさと」第17号は卒業式に合わせて、新入会員特集号として全員の氏名と就職・進学先を掲載した。
(学部卒347名、院修了41名、計388名)

同窓会館建設計画に関する広報活動の一翼を担って、昭和49年夏以来、新聞形式の会報「わかさと」を平均年4回発行してきたが、この時点で広報的役割は終わったものとして、今後は冊子形式の会報を年1回の発行を原則として復活させることとした。

S56・4・1 建築工学科設置 (4講座・学生定員40名)

機械系 (機械工学科・精密工学科)
電気系 (電気工学科・電子工学科・情報工学科)
建設系 (土木工学科・建築工学科)
化学系 (工業化学科・合成化学科)

- ・この当時の工学部は4系列9学科のバランスのとれた学部となった。
- ・学部の入学定員は420名となり、毎年の卒業生数は大学院工学研究科の終了生を含めると今後500名以上が予想される。
- ・このような情勢に呼応して同窓会も数年前から事務職員2名で取り組む体勢となった。

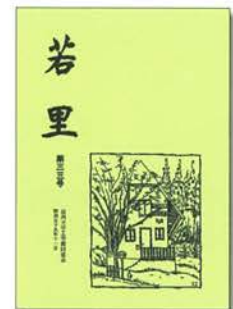
S56・11・28 冊子形式の同窓会誌「若里」第30号発行

- ・冊子形式の同窓会誌「若里」は昭和48年発行の第12号が最終号で、その後新聞形式の「わかさと」が17号まで続いており、両者を合わせると29号となり、これに続けての発行という意味から「若里」第30号として冊子形式を復活させた。
- ・冊子の大きさは以前と同じA5判であるが、ページ数は毎号60ページ以上に増加した。そのうち十数ページは広告を入れて収入増をはかった。第30号では17ページにわたり21社の広告が入った。広告の掲載には多くの卒業生の就職先からの協力が得られた。



復活した冊子形式の同窓会誌「若里」第30号の表紙 (A5判)

表紙のモデルチェンジ



戸隠山荘のスケッチを入れた「若里」第33号

S57・3 建築工学科実験棟新築落成

鉄筋コンクリート五階建



「若里」第34号からカラー写真

S58・4 長野県県民文化会館新築

長野県農業試験場の農場の跡地に会館と公園緑地などが出現した。後年、工学部と教育学部が卒業式を合同でこの会館で行うようになった。

S59・4 工学部福利施設の増築と全面改装

昭和51年に新築された学生食堂は発足当初は余裕があったが、学科の増設や大学院生の増加などで昼食時には非常に混雑で不便をきたした。大学は学生食堂の南側に広がる農地を数年間の交渉を経て入手することができた。この場所に学生食堂のスペースを増設することによって、広々とした大食堂と共に、便利な喫茶室も出現した。また、食堂と隣接して鉄筋コンクリート二階建の福利施設(学生談話室、生協購売部、理髪室などを収容)がつくられた。

S60・3・20 同窓会誌「若里」第33号発行

- ・昭和18年設立当時の5学科・入学定員200名が、現在は9学科入学定員420名に加えて大学院入学定員76名となり、信大で最大規模の学部へ発展した。
- ・「若里」第33号は、昭和20年の第1回の卒業生から昭和59年の第38回の卒業生に至る卒業生の数を学科別・年度別に集計して表示した。

学科別卒業生の総数

航空(33)、機械(1,620)、電気(1,357)、
通信(894)、土木(1,423)、工化(794)、
精工(881)、合化(411)、情報(313)
合計 8,313名

S60・4・1 同窓会会則の中に賛助会員を設ける

信州大学工学部同窓会会則(追加部分)

第2章会員 第3条 本会は下記の会員をもって組織する。
1 正会員(略) 2 特別会員(略)
3 賛助会員(在学生の父兄)
第6章会計 第15条(略) 第16条 1(略)
2 賛助会員は金30,000円を納入するものとする。但し、
賛助会員の子弟が卒業と同時にこれを終身会費に充当し、
子弟を正会員とする。
付則 本会則は昭和60年4月1日より施行する。

S60・4・1 大学院工学研究科修士課程に建築工学専攻を設置

学生定員8名。これにより修士専攻課程は9専攻で全学生数は76名となる。

S60・12・16 同窓会誌「若里」第34号発行

理事会は、同窓会を財団法人とすることについて、長野県との協議に入ることを会員に伝える。

S60・12 同窓会会員名簿59年版発行

B5判・431ページ・価格3,500円

S61・12・15 同窓会誌「若里」第35号発行

- ・理事会は法人化に向けて、同窓会館建設予定地と戸隠山荘の土地建物を法人基本財産とする準備に取り組む。
- ・同窓会賛助会員の入会金で賛助会員特別会計を新設。

S62・8・31 財団法人「若里会」の設立認可される

- 名称：財団法人信州大学工学部若里会
目的：工学を基礎とした幅広い産業文化の発展に寄与し併せて信州大学工学部同窓会の福利厚生を図る。
事業：(1)工学部各学科の専門分野に関する情報関連の産業振興
(2)長野県その他地域産業振興関連事項
(3)地域産業振興に関する図書及び雑誌の発行
(4)信州大学工学部同窓会の所有する動産および不動産の管理
(5)その他本会の目的を達成するために必要な事項

以下省略

- ・同窓会を法人化するための検討は昭和57年11月4日の総務会に始まる。
- ・同窓会の不動産と動産の管理に名義人の統一をはかり、それらの保全を確保し、社会的に認知される会員組織として公益性のある諸活動を通じて実のある団体を目指すために、長野県教育委員会に申請を続けてきた。
- ・昭和62年10月1日付で法人格を取得した。同窓会の所有でありながら法律上個人名義で登記せざるを得なかった戸隠山荘の土地と建物や同窓会館建設予定地は「財団法人信州大学工学部若里会」の名義で登記され、名実共に同窓会の所有となった。
- ・法人の義務として、目的に合う事業を行い、監督官庁(長野県教育委員会)へ年ごとに事業報告を行い承認を得ることになった。

S63・3・16 **卒業式と学位授与式を県民文化会館で教育学部と合同で行う**

この年から工学部合同で長野地区の卒業式を行うようになり、現在に至っている。



初の合同卒業式が行われた当時の県民文化会館

S63・5・24 **工学部学科改組に伴う助成**

信州大学工学部の学科改組に伴う助成を理事会で協議の結果、50万円の助成をすることに決定した。

H1・3・16 **卒業生の総数1万名を突破**

昭和20年9月、信州大学工学部の前身である長野工業専門学校が初の卒業生171名を送り出してから43年の星霜を経て、平成元年3月卒業式の時点で卒業生の総数は10,310名に達した。

学科別卒業生数(他大学出身の大学院修了者数を含む)

航空(33)、機械(1,859)、電気(1,561)、
通信・電子(1,774)、土木(1,702)、工化(972)、
精工(1,075)、合化(606)、情報(546)、建築(182)
合計 10,310名

H1・4・1 **学部の改組による大学科制を導入**

科学技術の発展と社会の変化に対応するため、工学基礎及び専門的な勉強に加えて、学際的な知識の修得を目標として改組が行われた。これにより情報工学科は大幅な増員となったが、機械系以外の学科は減員となった。

旧学科名と定員	新学科名と定員
[機械(55)] + [精密(44)]	⇒ [生産システム工学科(100)]
[電気(44)] + [電子(65)]	⇒ [電気電子工学科(95)]
[土木(65)] + [建築(44)]	⇒ [社会開発工学科(95)]
[工化(44)] + [合化(44)]	⇒ [物質工学科(80)]
[情報(55)]	⇒ [情報工学科(90)]
定員合計 460名	定員合計 460名

H2・7・24 **会則の見直しを検討**

正副理事長会で、会則全般を見直し、時代に即応した改正を検討したが、次回へ見送る。その後、数回の継続審議を重ね平成4年度の総会で改正が承認される運びとなった。

H3・4・12 **工学系大学院博士課程新設**

工学部と繊維学部を基盤として、既設の修士課程を博士前期課程に改組し、新たに博士後期課程を新設した。当時、後期課程の約70%の入学生は社会人特別選抜によるもので、各企業や機関に在籍のまま非常勤で研究活動を行うことができた。

博士後期課程には平成10年に理学部が加わり、平成17年に農学部が加わって、工学、理学、農学、繊維学部からなる「総合工学系独立研究科博士課程」となり、現在に至っている。

H3・12・10 **同窓会誌「若里」第40号で、同窓会館建設実行委員会の解散を会員に伝える**

昭和50年4月19日に同窓会館建設実行委員会を発足させ、昭和52年11月24日に土地購入。その後の募金状況を「同窓会館特別会計」として扱ってきたが、この年度で実行委員会を解散し、財団法人若里会をもってこれに代え、窓口を継続し、所期事業を推進することとした。



H3・12 **同窓会会員名簿(平成3年版)発行**

前回の会員名簿(昭和59年版)の発行後、会員数は11,000名を越え、新入会員に加えて勤務先や住所の変更移動を収録した名簿(3,200円)を発行。

H4・6・20 信州大学工学部同窓会会則大幅改正

平成4年6月20日の同窓会総会で、理事会の原案が承認された。会則の改正部分は「若里第41号(H5.3.25)」に新旧の会則を対比して詳細に示されている。要点を右に示す。

1. 正会員に信州大学大学院工学系研究科博士前期課程および後期課程の修了者を加えた。
 2. 特別会員の推薦は評議員会に代わり理事会が行うものとした。
 3. 役員の中からこれまでの評議員をなくし、会の運営を理事会中心のものとした。
 - ・ これまでは同期正会員中より各科1名ずつ互選された評議員が理事と監事を選出し、理事は会務をつかさどり、重要事項は評議員会で決議していた。
 - ・ 改正後は理事は正会員中から選出し、理事会で互選された正副の理事長が会務に必要な事項の審議と執行を行い、正副理事長会で発議した重要事項は理事会で審議・決定するものとした。
 - ・ 最高の決議機関としての総会は次のように改めた。
- 第4章 総会 第9条 総会は原則として年1回開催する。ただし理事会と財団法人若里会理事会および評議員会で議した場合にはそれに代えることができる。(財団法人信州大学工学部若里会には役員として理事6人以上15人以下、内理事長1人、副理事長2人、評議員10人以上20人以下、監事2人がおかれている。)

H5・3・16 旧学科時代の最後の卒業および修了者

平成元年に行われた大学科制への改組の前は、工学部の学科数は10学科であった。この日、旧学科の最後の卒業・終了式が行われた。この時点において各学科の卒業・修了者の総数は、工専時代の航空(33名)を加えて、11,712名に達した。

学科別卒業・終了生の総数

航空(33)、機械(2,031)、電気(1,702)、
通信・電子(1,971)、土木(1,904)、工化(1,117)、
精工(1,212)、合化(740)、情報(687)、建築(315)
合計 11,712名

H5・4・1 高専・短大編入生10名が定員化される

H5・8・26 戸隠山荘への出費が年々増大

山荘の補修工事()内は年度

板壁塗装(S56)・排気筒交換(S60)
ホール床改造(S61)・玄関・浴室改造(S61)
屋根雪止工事(S62)・水道・配水(S62)
ボイラー(S63)・諸設備(H2)
屋根(H3)・窓枠(H4)・外壁(H5)

昭和43年の開館後四半世紀をすぎた戸隠山荘の維持補修費は数年前から次第に増加し、これに対して毎回の理事会では継続審議を重ねながら対応してきた。同窓会からの補助金の額は、昭和59年から平成3年までは毎年100万円、平成4年以降は毎年200万円となった。この日行われた理事会では山荘の老朽化診断を専門家に依頼し、今後の対応に備えることとした。

H5・10・28 他大学の同窓会へのアンケート調査

関東甲信越、北陸、中部地区の他大学の工学部19校へ同窓会の活動についてのアンケート調査を行い、17校から回答を得た。()内は回答数

- ・ 同窓会館がある(2)、建設中(0)、将来考える(8)、考えない(7)
- ・ 同窓会誌を毎年発行(10)、名簿を毎年発行(7)
- ・ 新入会員歓迎会開催(8)、在学生のための講演会開催(4)

H6・3 課外活動施設竣工

体育館と福利施設の間の空地を利用して、学生の課外活動施設が竣工した。鉄筋コンクリート二階建の立派な施設である。

H6・4・1 第四代理事長に箕輪操就任
(電気24年卒)

当時の同窓会役員

理事長1名 副理事長3名 理事41名
監事2名 顧問3名
(理事の役割分担)
財政・会計・法規・編集・山荘・広告

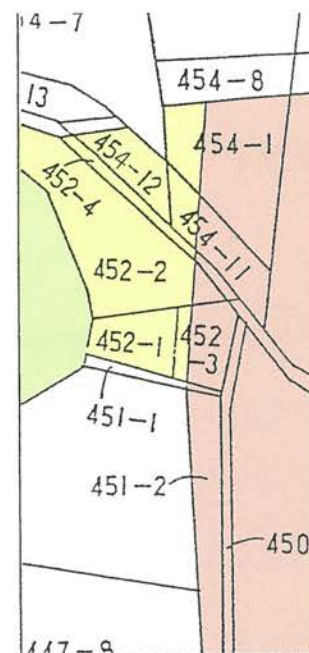
H6・7・18 理事会で会の運営上の諸問題を検討

この日の理事会では、同窓会の今後の運営について次の諸問題が検討された。

- (1) 同窓会として留学生の補助や奨学金制度を預金利子で行うことを数年前から検討していたが、最近の低金利に伴う収入減で具体化できない状況となっている。
- (2) 戸隠村環境整備に伴う下水道工事の分担金を負担する。
- (3) 会報発行の印刷費と郵送費が同窓会総支出の75%を占めている。

H7・3・30 工学部と若里会の土地交換で境界線を整理

同窓会館の建設予定地として取得した、若里会の所有地と工学部の所有地の境界線は複雑な形状であり、この形状を整理し、土地への入口部の狭さを解消する目的で、両者の所有地の等積交換を行う交渉が昭和63年から続けられてきた。この日、法的な手順を経て交換の契約に至った。



土地交換は工学部所有地の454-1と454-11の一部を同窓会に、同窓会所有地の452-2と452-3と452-4の一部を工学部に渡す条件で行った。

H7・6・23 地域共同研究センター(CRC)の建物竣工

鉄筋コンクリート三階建

H7・10・4 信州大学工学部若手教官研究助成金交付開始

工学部に在職する若手教官の研究活動を支援する目的で財団法人信州大学工学部若里会の事業のひとつとして創設した。

助成の対象者は信州大学工学部に勤務する助教授、講師および助手で、応募者は研究助成申請書を提出し、これを選考委員会(学部長・各学科長・若里会からの委員1名)で審査・選考する。

H8・4・10 大学院工学系と教育系研究科の合同入学式を県民文化会館で挙

H9・1・24 リフレッシュ信州工学フォーラム'97開催

信州大学工学部主催、信濃毎日新聞社共催、財団法人信州大学工学部若里会後援で開催。

基調講演：伝田精一(通29)「工学部に期待するもの」
会場：ホテルメトロポリタン、参加者300名余。

H9・4・1 高専・短大編入生の定員を10名増員

平成5年の10名分と合わせて定員は20名となる。

H9・4・1 工業高校生の推薦入学を設ける(定員11名)

H9・4・1 若里会常務理事を増員

若里会の執行部はこれまで理事長1名、副理事長3名、常務理事1名であったが、新年度からは常務理事を増員して4名とし、それぞれの責任分担により会務を執行することになった。

H9・8・21 信州大学太田国際記念館竣工

太田三郎氏(オリオン機械株式会社代表取締役会長)が会社創立50周年に当たり、私財を投じて鉄筋コンクリート三階建の建物を土木工学科棟の南東部に建設し、内部の付帯設備一式と共に工学部に寄贈した。これは国際交流に寄与できる多目的な施設を大学へ寄付したいという同氏の篤志によるものである。

1階:ホール・展示コーナー・語学研修室・会議室

2階:大会議室・準備室・リフレッシュコーナー

3階:宿泊室3室・談話室

・教育や学術に関する諸会議、研修や非常勤講師等外来者の宿泊もできる多目的施設として、留学生を主体とする国際交流の進展を目指す。

H9・12・25 同窓会会員名簿(平成9年版)発行

H9・12 戸隠山荘の経営に新たな取り組み

より便利に より快適に
戸隠山荘がリニューアル!

★オールシーズンオープンとなりました
ご家族で 仲間同士で 四季折々の素晴らしい戸隠高原の自然をお楽しみ下さい。

予約は ご利用の10日前までに
電話・FAX または葉書で
同窓会事務局へ
TEL・FAX共用 026-266-8209

★清潔で明るく
気持ちよい部屋に
リフレッシュ
新しいふすまに ほっかほっかの布団
清潔な部屋 気持ちよい風呂 水洗トイレ
など とてもピクニックに改装しました!

★新幹線で マイカーで アクセスも抜群
新幹線の間で 首都圏と信州の自然がくっつくようになりました。
長野駅からバス80分・タクシー40分で戸隠スキー場に! 山荘はもう目の前です。
ハイウェイからのアクセス(コースの詳細は裏ページの案内図をご覧ください)
長野Cより30km(途中観光:善光寺・長野冬季オリンピック会場B力所)
信濃町ICより17km(途中観光:野尻湖・ナフマン倉庫博物館・一茶記念館)

★本格的なプロの味に舌鼓
イタリア風・フランス風など 洋風料理が得意なマネージャー・コックが登場しました
ワインやコーヒーにも詳しく 本格的な手作り料理で 親切に おもてなし致します
山荘の新しい味とムードを どうぞお楽しみ下さい。

利用料金(会員1名あたりの料金です 詳細は裏ページをご覧ください)
室料:A室4,000円 B室3,000円(一般は500円割増)
夕食:800円 朝食:400円 冬期暖房費:200円
パンチャマはご持参下さい 浴衣の使用料は500円です

若里第47号の裏表紙(戸隠山荘の利用案内)

平成9年から山荘の経営方針を利用客へのサービスに重点を置くことにした。夏季の営業を休んで下水道を整備してトイレを水洗とし、客室も気持ち良いように改装した。これまでの季節限定の開館期間をオールシーズンオープンに改めた。新しい管理人は客の入らない場合は室内の補修や美化を行い、1年後には山荘はピカピカの快適なものに生まれ変わった。管理人の料理やサービスも好評で、利用客の数も年ごとに回復していった。

山荘の経営状況(利用客の減少から経営方針転換による回復状況)

年度	宿泊者数	宿泊料金	補助金	工事・営繕費	内容
H3	520名	180万円	100万円	50万円	屋根・室内壁
H4	411	149	200	84	屋根・窓枠
H5	393	147	200	58	外壁
H6	244	110	100	53	外壁
H7	151	87	300	1	補修
H8	172	70	300	1	補修
H9	180	72	300	326	下水道・タタミ
H10	506	222	300	17	工事材料※
H11	675	310	300	28	工事材料※

※工事材料は管理人が山荘の補修工事に用いた建築関係の資材である。

H10・2 冬季オリンピック・パラリンピック大会でボランティア活動

工学部からボランティア活動への参加者数
学生556名 教職員41名

ボランティア活動に向けて、工学部は平成7年12月に団体機関として登録した。活動は主として情報通信分野での支援業務で、運営本部、各競技会場、メディアプレスセンターなどでの入力業務やリザルト関係業務の支援に携わった。

H10・4・1 環境機能工学科発足(定員50名・3大講座制)

- ・生産システム工学科と物質工学科からの学生定員20名ずつと純増10名からなる定員50名の学科が誕生した。これに伴い、生産システム工学科は機械システム工学科に名称変更して定員80名に、物質工学科は定員60名に改組された。
- ・入学定員は半世紀を経て3.5倍に達した。
昭和24年 信州大学工学部発足時 135名
平成10年 環境機能工学科発足時 470名

H10・11・4 リフレッシュ信州大学フォーラム'98開催

パネリストとして箕輪操理事長(電気24)と菱田拓郎副理事長(電28)が参加した。参加者201名

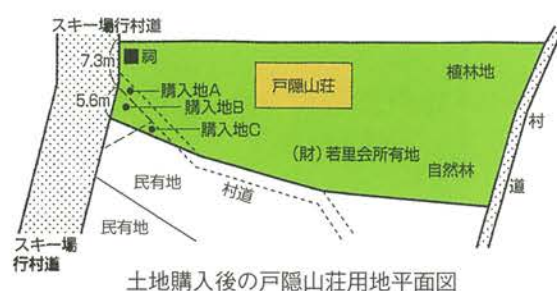
H11・3・29 国際交流会館竣工(鉄筋コンクリート三階建)

学生寄宿舍(若里寮)の東側に隣接して建てられ、留学生の宿舍とともに交流の場として利用されている。

H11・7・16 信州大学工学部外部評価(教育)の実施に助成金

大学設置基準の改正により、外部評価委員17名による評価が10月14日と15日に行われた。これに対して(財)若里会から60万円を寄付した。

H12・3・7 戸隠山荘入口の土地購入、登記完了
山荘の入口が広くなり、用地面積は412坪から431坪に増加した。



H12・4・1 第五代理事長に菱田拓郎就任
(電気28年卒)

H12・8・25 信州大学工学部外部評価(研究)の実施に助成金

外部評価委員による評価が12月7日と8日に行われ、(財)若里会から100万円を寄付した。

H12・10・27 同窓会館建設用地の登記完了

平成7年3月30日付で工学部と契約を交わした土地境界線の整正と所有地の等積交換について、平成12年8月2日に正副理事長と信州大学事務局および隣接土地所有者である県の関係者による立ち合いで境界線を確認した。そして司法書士に依頼して、多数に分筆されている地番の合筆も含めて登記を完了した。

H13・5・30 工学部が国際環境規格ISO14001の認証を取得

国公立大学の学部・大学院としては初めての取得である。

H13・7・11 戸隠山荘の改修を予算化

老朽化の激しい戸隠山荘の屋根・外壁・物置の改修を行うこととした。なお、この改修工事は11月末に完了した。

H14・1・23 若里会のホームページを計画

公益法人等のホームページの公開が閣僚会議幹事会の申し合わせとなり、これを受けて同窓会(若里会)は専用のサーバーを設けてホームページを作成することになった。

H14・4・1 第六代理事長に柳沢武三郎就任
(通信31年卒)

H14・5・24 学部助成金を各学科に20万円と定める

この日行われた理事・評議員会で、(財)若里会からの学部助成は今後、費目を問わず、各学科に年間20万円の補助を行うこととした。

H14・7・12 同窓会館と戸隠山荘の将来展望

戸隠山荘と同窓会館建設用地は(財)若里会の基本財産となっていることを踏まえて、これまでの経緯と実績を検討して将来の対策に取り組むことがこの日の常任理事会で決まった。

H14・10・30 技報こまくさ第1号発行

(財)若里会の公益性と社会寄与の原点から、最新の科学技術を展望できる情報誌として「技報こまくさ」を創刊した。創刊号は平成7年から実施してきた母校の若手教官の研究成果を総括した。以後は毎年1回の発行となった。



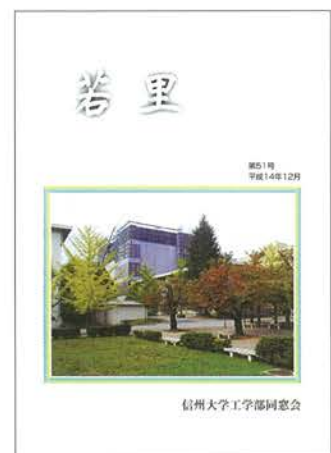
(財)若里会が発行した技術情報誌「こまくさ」創刊号10編の技術論文掲載

H14・12・10 同窓会誌「若里」がA5判からA4判に変更される



会誌「若里」第50号の表紙

- ・A5判縦書き会報の最終版
- ・表紙にはこれまでに発行した会報の題字や写真を集録した。
- ①昭和25年に長野工業専門学校同窓会が発行した会報の題字
- ②昭和30年に工学部同窓会が発行した創刊号の題字
- ③昭和49年から昭和56年まで新聞形式の会報を発行したときの題字
- ④カラーの16コマの写真は若里34号(昭和60年)から若里49号(平成13年)までの表紙に用いた写真



会誌「若里」第51号の表紙

これまでの縦書きが第51号よりすべて横書きのA4判の編集となった。文字や写真を大きくして読みやすいものとした。

H15・2・20 工学部に高層ビル：総合研究棟竣工

旧機械工学科実験研究棟の跡地に鉄筋コンクリート八階建の高層ビルが完成し、総合研究棟として利用に供されることとなった。これと並行して各学科研究棟の改修工事が開始され、平成22年4月までに全学科の改修を終えた。

会則第6章会計 第12条1の終身会費に関する取り扱いについて、理事会は約1年間検討を重ね、この日の総会で改正が認められた。

下線の部分が追加されて、終身会費の枠が拡大された。

12条の1 正会員は、会費として年額2,000円を納入するものとする。なお、正会員から納入された会費の合計額が40,000円に達した場合、それを終身会費として充当することができる。また65歳に達した正会員のうち、会費未納がない正会員に対しては翌年度から会費を免除する。

H15・5・28 理事・評議員会および総会で戸隠山荘の休館を決定。

・築後35年を経た戸隠山荘は、高原の厳しい気象条件に加えて建物内諸設備の老朽化も進み、平成14年度に行った専門機関の診断では、安全管理上の応急手当だけでも1,500万円を要すること、そしてすべてを新築するならば7,000万円以上かかることが報告された。

- ・若里会の総会では、山荘経営の実態を見て、経営の廃止を求める意見が年ごとに増していった。また、全国的にスキーの人気の低下しつつある現状からみて、理事会はこれ以上補助金を注入しても根本的な経営改善はできないと判断して、「営業は平成15年度までを行い、以後は休館とする」という方針を立て、これが5月28日の総会で承認された。
- ・かくして、同窓生の熱意と献身的な努力で戸隠スキー場に近く建てられた若里会戸隠山荘の歴史は、数々の思い出を残して幕を閉じることになる。

若里会戸隠山荘経営の総括

・昭和49年度から平成14年度までの29年間の山荘経営の実績は以下に示す表とグラフのようになる。発足当初の6年間（昭和43年度～48年度）までの資料は分散して入手困難。

戸隠山荘建設費用（昭和42年）

土地購入代	山荘建築工事費	総計(円)
680,000	6,286,910	6,966,910

戸隠山荘収支状況（昭和49年度～平成14年度）

<収入>

費目	金額(円)	備考
繰越金	766,751	昭和48年度繰越金
補助金	39,105,515	若里会より
宿泊料	53,253,412	15714名(延べ)
雑収入	4,806,272	利息・保険他
合計	97,931,950	

<支出>

費目	金額(円)	備考
管理人手当	29,642,380	
給食費	14,021,462	
光熱費	10,068,987	灯油・ガス・電気・水道
営繕費	4,070,560	
工事費	14,950,234	
備品	6,495,762	
衛生費	2,706,182	
予備費	2,408,321	
火災保険	6,425,780	
その他	7,142,282	
合計	97,931,950	



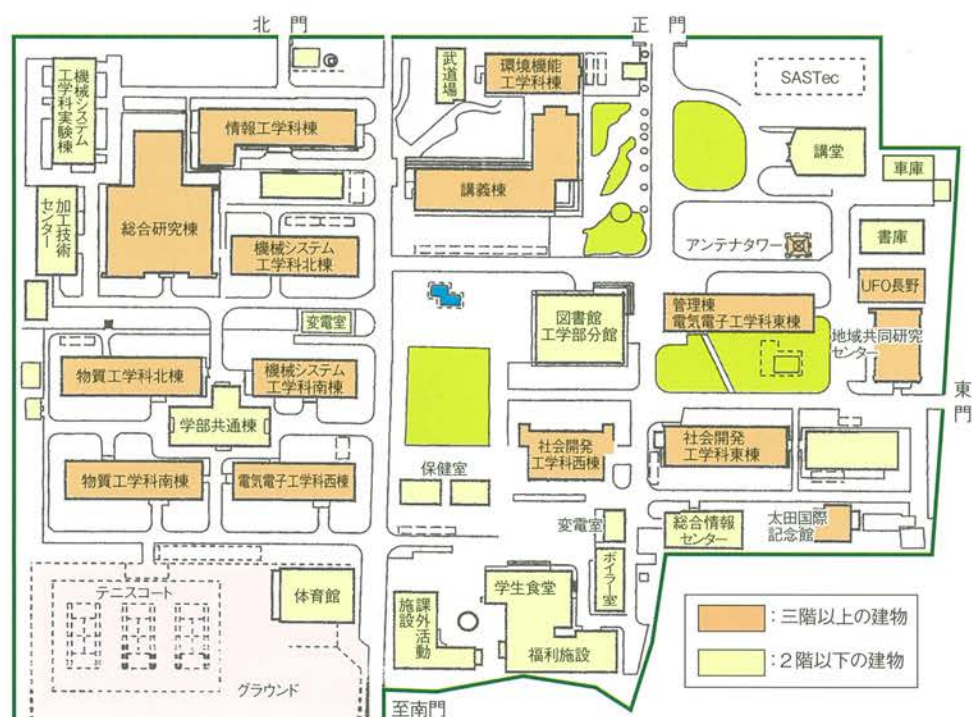
戸隠山荘の総支出額と宿泊代収入の比較



宿泊人数・人件費・工事費・同窓会からの補助金

H15・6・18 ISO 学生委員会へ助成を開始	ISO 学生委員会の学生自身が活動するための助成として財団法人若里会から10万円の補助を行う。以後この補助は毎年継続している。
H16・4・1 国立大学法人信州大学が発足 信州大学を含む99の国立大学が平成16年度(2004年)から法人化された。昭和24年(1949年)の新制大学の発足以来の大きな改革である。それぞれの大学が独立の法人となり、「国立大学法人・信州大学」が「国立大学・信州大学」を運営することとなった。	学長をトップとした役員会(学外者を入れる)が大学の経営および管理運営にリーダーシップをとる。国からの運営交付金の使途は大部分法人に任せられる。教職員の身分は国家公務員でなくなり、法人職員となつて、労働基準法に従うことになる。教員には裁量労働制が適用され、残業手当は出ないが、出退勤に関しては自由度が認められた。
H16・4・27 戸隠山荘の管理と財産の整理	この日の理事会で山荘と土地の管理を隣地の梅田晃尚氏と契約すること、山荘に寄贈されている杉山璋夫画伯(土木22年卒)の絵画は工学部の総合研究棟に飾ってもらうこと、各種物品および寝具類は戸隠スキー教室の施設に寄付することを決めた。
H16・6・1 信州大学工学部同窓会若里会ホームページ開設	HP: http://www.wakasatokai.jp/
H16・9・14 信州大学連合同窓会役員に柳沢理事長を選出	<ul style="list-style-type: none"> ・信州大学の法人化を機として設立された信州大学連合同窓会の役員に、各学部同窓会から1名を選出することとなり、この日の常任理事会で柳沢武三郎理事長を選出した。 ・この年度から連合同窓会の年会費7万円を支払っている。
H17・4・1 長野市ものづくり支援センター開所 鉄筋コンクリート五階建	大学の法人化を機に「大学は広く地域の発展に貢献すること」が社会的要請となり、長野市と経済産業省の経費折半で工学部敷地内にCRC(地域共同研究センター)と隣接して、UFO Nagano (University Factory Of Nagano: 長野市産学行連携試作・開発センター)を開所した。
H17・8・11 同窓会事務就業規則制定	信州大学工学部若里会及び信州大学工学部同窓会就業規則、給与及び退職金に関する規定、雇用通知書に関する規定を定めた。当面の雇用に関しては臨時雇用を続けることとした。
H17・8・11 工業高校生ロボコン、ものづくりコンテストへの助成開始	長野県工業高等学校長会よりの申請に対して30万円を助成する。その後も工業教育振興助成費という名目で(財)若里会は長野県工業高等学校長会へ毎年30万円の助成を行っている。
H18・5・27 信州大学工学部同窓会会則改正	<p>第4章 総会 第9条を改正した。</p> <p>改正前: 総会は原則として年1回開催する。ただし理事会と財団法人若里会および評議員会で議した場合はそれに代えることができる。</p> <p>改正後: 総会は原則として年1回開催する。ただし理事会で議した場合はそれに代えることができる。</p>

信州大学工学部建物配置図(平成17年)



- ・この図は、平成17年にUFO長野が竣工した時点における工学部の建物の配置を示した略図である。
- ・SASTec(平成21年竣工)の位置も破線で示した。
- ・SASTecは間口39m、奥行20m、鉄筋コンクリート三階建てで、同窓会の事務室は二階の西端にある。

H18・9・15 戸隠山荘の建物再診断

休館から3年を経た戸隠山荘は、専門家による建物再診断の結果、老朽化に伴う劣化が激しく、安全性の確保が極めて困難なことが分かった。この日の理事会では解体撤去も止むを得ないという結論に至り、山荘の取り壊しを検討することとした。

H19・2・22 同窓会館建設と同窓会事務室の検討

同窓会館の建設は、母校創立35周年記念事業として計画され、1974年に実行委員会を設立して募金活動に取り組んだが、オイルショックによる経済の停滞に見舞われ、用地は取得したものの、資金的には会館を建設できる額に達しない状態が続いてきた。これまでに寄せられてきた募金額の有効活用、戸隠山荘が消滅した後の同窓会の絆を示すシンボルの必要性、そして会員数が20,000名に迫る情勢にもかかわらず、手狭で間借り的な同窓会事務室の解決策などを踏まえて、常任理事会は検討を開始した。

H19・5・26 戸隠山荘の解体撤去を総会で承認

戸隠山荘に関するこれまでの理事会の取り組みと、解体撤去の結論に至った常任理事会の検討結果が報告され、全会一致で取り壊しを承認した。

H19・8・7 同窓会事務室移転

本館管理棟(三階以上は電気電子東棟)の改修に伴って、同棟三階の演習室の一部を30年以上にわたり借用してきた同窓会事務室を、太田国際記念館の三階の一室に移転した。

H19・8・17 工学部60周年記念事業計画WG発足

工学部からは6名の委員、同窓会からは5名の常務理事を選んで、記念事業の準備委員会の設置に向けた取り組みを始めた。

H19・10・20 戸隠山荘降棟式

戸隠山荘に理事長以下7名の理事が集まり、山荘の取り壊しにあたり、降棟式の神事を行った。山荘は10月下旬に解体撤去され、整地後は更地として管理されている。

H20・4・1 社会開発工学科を土木工学科と建築学科に改組

土木工学科（定員45名）と建築学科（定員50名）に改組された。

これにより信州大学工学部は、機械システム工学科、電気電子工学科、土木工学科、建築学科、物質工学科、情報工学科、環境機能工学科の7学科に加え、大学院工学系研究科修士課程6専攻、さらに総合工学系研究科博士課程4専攻の教育体制で、信州大学最大規模の学部となった。

H20・4・24 信州科学技術総合振興センター建設事業の推進を了承

常任理事会はこれまでに母校60周年の記念事業として、何らかの形に残る施設の実現を目指して検討を重ねてきた。初期段階では教室設備の更新と充実、老朽化した講堂の改修、同窓会館の建設などが候補に挙げられてきたが、工学部の希望する産学官連携研究と人材育成に供する施設「信州科学技術総合振興センター（SASTec：Shinshu Advanced Science and Technology Center）」の建設事業を、国の助成制度を利用して推進することを、この日の理事・評議員会で了承した。

H20・5・16 同窓会事務室移転

建物改修工事の終了した本館管理棟の二階の一室に事務室を移転した。

H20・10・20 経済産業省より補助金の交付決定

経済産業省平成20年度企業立地促進等共同施設整備補助金の交付が決定され、SASTecの建設が可能となった。

H20・11・14 工学部創立60周年記念事業募金趣意書発送

同窓会誌「若里」第57号と共に募金趣意書を発送して、会員全員に60周年記念事業への協力と募金を呼びかけた。

H21・2・16 講堂撤去工事開始

H21・3・19 SASTec 建設工事開始

H21・11・30 SASTec 竣工（鉄筋コンクリート三階建）
竣工したSASTecの全景（右写真）写真の二階の左端（西端）に同窓会の事務室がある。



H21・12・5 工学部創立60周年記念式典・講演開催

午前の部 SASTec(信州科学技術総合振興センター)見学会
午後の部 記念講演・記念特別講演・記念式典・祝賀会
(ホテルメトロポリタン長野)

記念特別講演（同窓生の講演者）

遠藤守信（信州大学教授・電気工学科44年卒）
信州大学発のグリーン・イノベーションをめざして

南雲忠信（横浜ゴム㈱社長・工業化学科44年卒）
快と不快～私の経営哲学

H22・3・25 新築のSASTecに同窓会事務室誕生
産学連携の研究開発と交流にあたる
信州大学工学部創立60周年記念事業の一環として実現したSASTecの二階の一室に、同窓生を中心とした産学連携の研究交流室が誕生した。広さは10m×6m＝66㎡で、会議コーナー、事務コーナー、応接コーナーに仕切られ、60年以上にわたる同窓会の活動記録も分類保管されて、同窓生諸氏の来学を待ち望んでいる。



同窓会の事務コーナー

信州大学工学部同窓会および財団法人信州大学工学部若里会による各種事業

信州大学工学部同窓会

信州大学工学部同窓会は、会員相互の親睦と母校の後援を主目的として、次のような事業を行っている。

- 1) **新入会員に対する卒業祝の贈呈**：信州大学工学部第一回卒業証書授与式(昭和28年3月)以来、学部卒業生全員に卒業証書保存用の筒を贈呈。平成17年3月以降は卒業証書の形式変更に伴いホルダーを贈呈。
- 2) **卒業祝賀会の開催**：学位授与式終了後に恒例の祝賀会を開催。昭和50年から平成15年までの29年間は、全教職員にも祝賀用の酒・赤飯・料理を学科別に配布。平成16年3月以降は、諸般の事情により祝賀会と教職員への配布を中止し、学部卒業生のみ卒業記念品として名刺入れを贈呈。
- 3) **支部助成**：各地方における信州大学工学部同窓会の支部総会の開催のたびに規定額を助成。
- 4) **学部助成**：信州大学工学部に対して、定額の助成を毎年継続。
- 5) **大学祭への助成**：学生が行う大学祭(松本地区および工学部で個別に開催)に対して両地区に毎年助成。
- 6) **同窓会誌の発行**：毎年同窓会誌「若里」の発行と全会員への送付。他に会員名簿(別冊・有料)を適宜発行。
- 7) **戸隠山荘の経営**：財団法人若里会の設立(S62)以降は経営を若里会が行う(経営期間：S43～H19)。

財団法人信州大学工学部若里会

工学を基礎とした幅広い産業文化の発展に寄与し、併せて信州大学工学部同窓会の福利厚生を図ることを目的として、昭和62年8月に設立した若里会は：情報と産業振興の調査研究、地域産業の振興とこれに関する図書・雑誌の発行、同窓会の動産・不動産の管理、等を掲げて次のような事業を行ってきた。

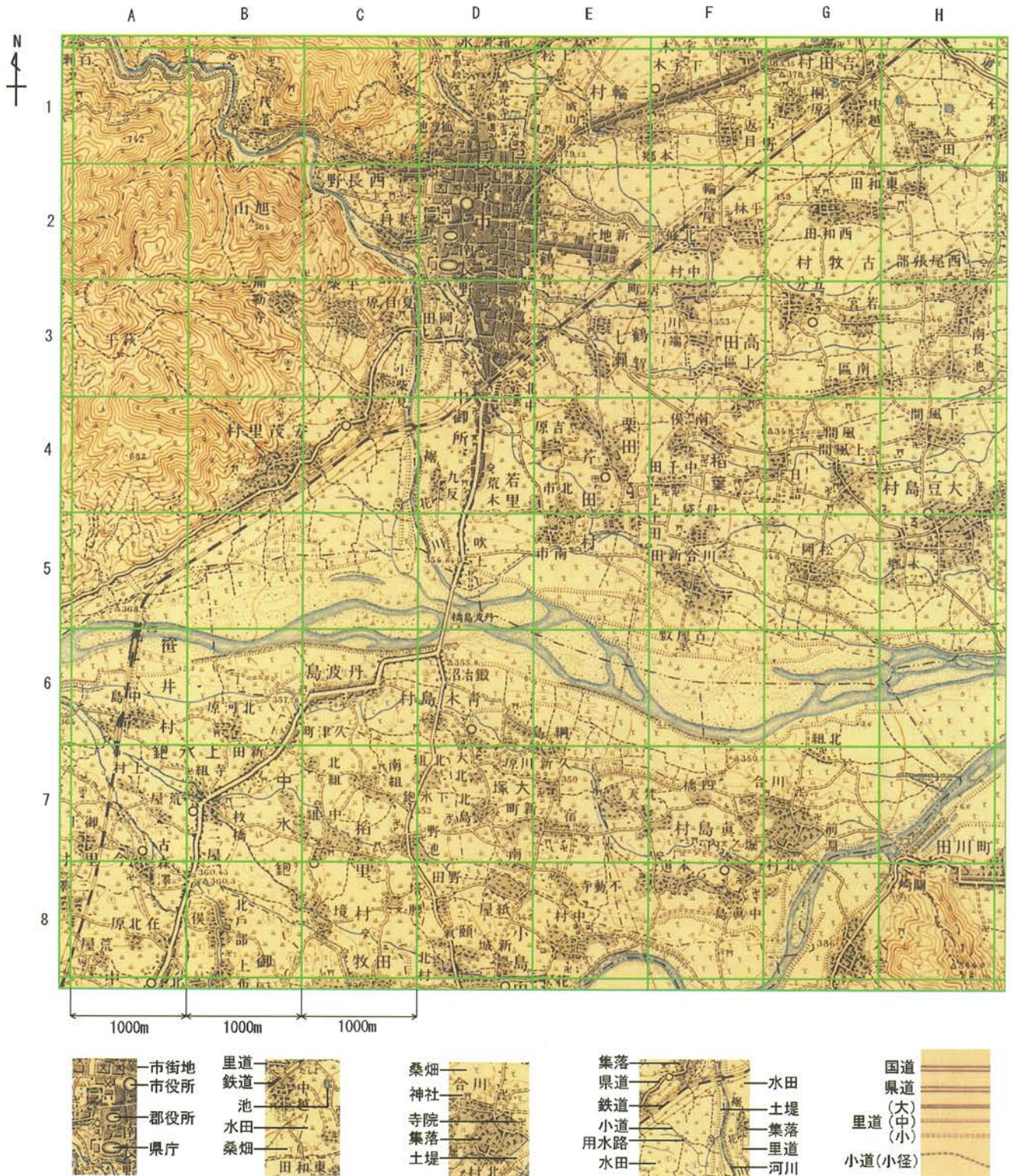
- 8) **学科助成**：昭和62年より、工学部内の各学科へ毎年助成を継続している。
- 9) **研究助成**：助教授(准教授)以下の若手教官を対象に、研究助成審査委員会を経て助成(H7～H21)。
- 10) **技術情報誌(こまくさ)の発行**：上記の研究助成による研究成果を収録した技術情報誌(H14～H21)。
- 11) **工業教育振興助成**：県内工業高校生のロボコン・ものづくりコンテストへの助成(H17～H21)。
信州大学工学部生のロボコン(NHK)参加への助成(H20～H21)。
- 12) **ISO活動への助成**：ISO学生委員会活動への助成(H15～H21)・環境ISO全国大会への助成(H17)。
- 13) **フォーラム開催助成**：リフレッシュ信州工学フォーラム'97開催に対する助成(H10)。
- 14) **外部評価の実施に関する助成**：信州大学工学部外部評価(研究H11・教育H12)の実施に対する援助。
- 15) **その他**：「2003青少年科学の祭典」への協賛費、北陸信越教育協会講演会助成、その他数件(省略)。

同窓会の募金事業による成果

- 16) **戸隠山荘建設用地の購入と山荘の建設**：戸隠山荘落成祝賀会の記事(本誌：S42・11・4)に内容記述。
- 17) **同窓会館建設用地の購入**：同窓会館建設実行委員会解散の記事(本誌：H3・12・10)に内容記述。
- 18) **工学部創立60周年記念事業への寄付**：150,000,000円(SASTec建設の助成)。

時空間探訪：地形図が語る若里と周辺の百年史

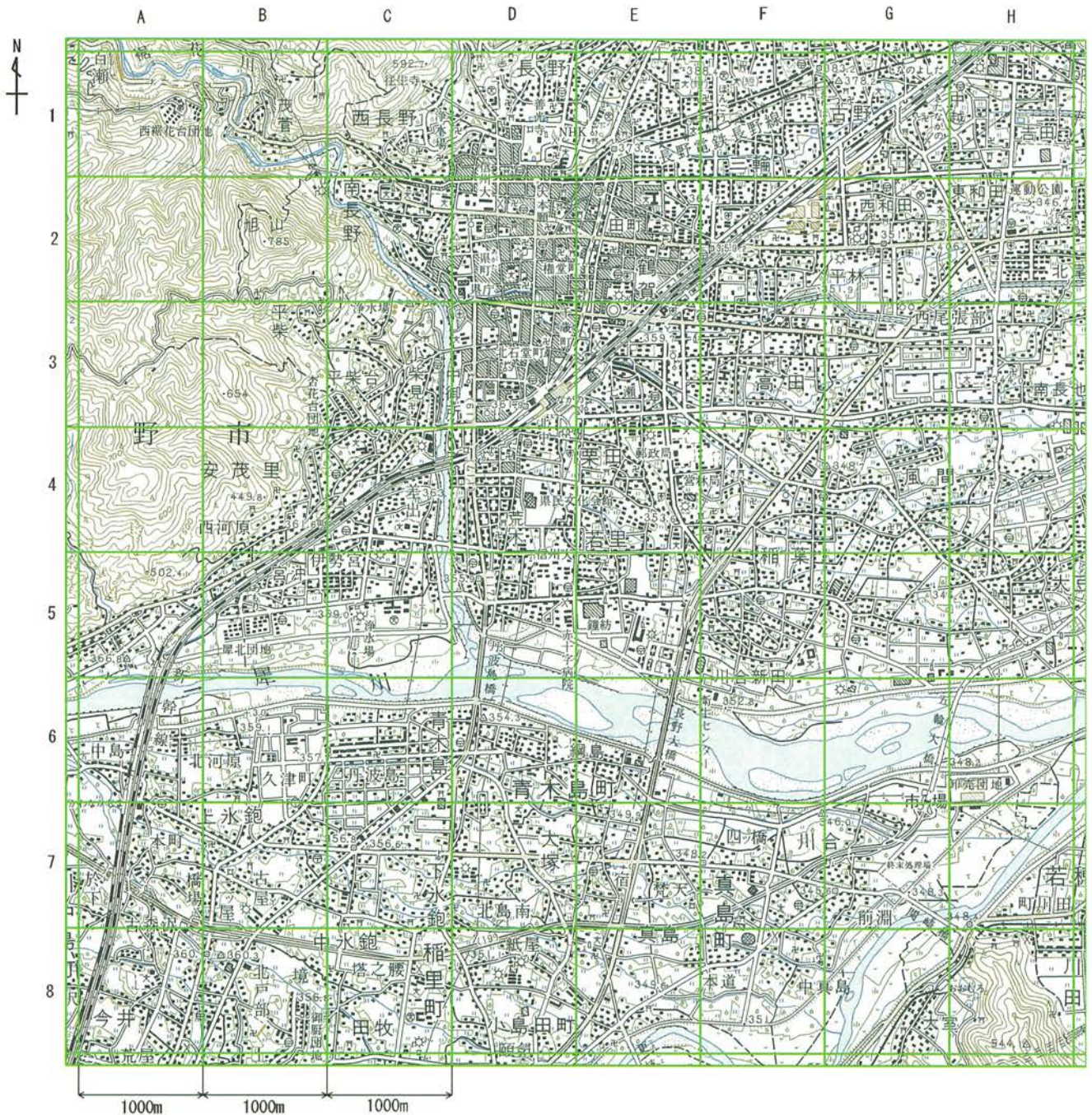
大正元年(1912年)の測量による地形図(1/50,000)



国土地理院発行の五万分の一地形図の一部を抜粋加工したものを左右のページに示す。この地形図は現地と相似に描かれている。但し道路と鉄道の幅員及び家屋の大きさと数は記号表示である。今昔比較のために地形図上に1km平方のメッシュをつけた。中心は大学東北部の北市交差点である。若里キャンパスの位置はメッシュD5の中にある。百年史と言うには若干年数不足だが、主要道路と新幹線は1998年の長野冬季五輪までに完成しており、現在(2010年=大正99年)の状況と大差はない。但しメッシュE5では1998年以降に大型施設の変動がある(31ページを参照)。

在りし日の村々の田園風景は長野市の町並に変わる

平成10年(1998年)の測量による地形図(1/50,000)

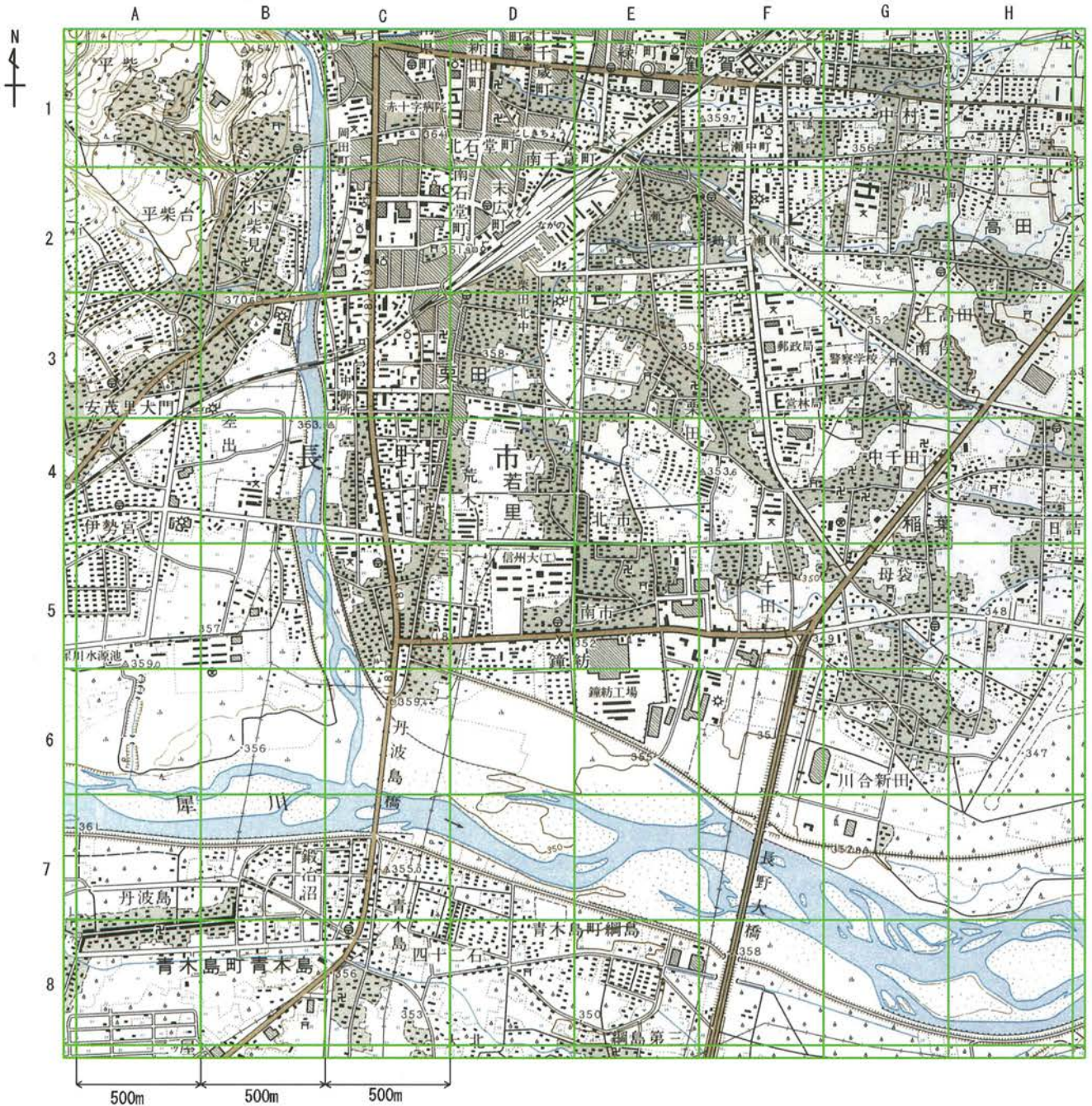


左図 この地域を示す最も古い地形図である。地形図上の記号は現在と多少異なるので別掲した。また横書きの文字の向きは現在とは逆である。長野駅から善光寺あたりまでが市街地化している。北国街道は若里から市街地へ、そして三輪村、吉田村へと続く。直線状や碁盤目状の道路は市街地のみで、他の道路は河川や当時の用水路の自然に近い流れに沿うために複雑な形状である。犀川と裾花川の合流部から下流には水害を防ぐための沢山の土堤がある。各メッシュについて100年前の土地の状況を観察できる。平野部については次の諸点に着目して、現代の土地利用状況(右図)を考察できる。住宅地(周辺よりやや高い地盤)、水田(湿地で粘土や細砂)、桑畑(乾燥地で砂礫質)、水(河川・用水路・池)。

右図 川による交通運輸の要所であった若里キャンパスの一带[メッシュD5]は、今では道路交通の要所と化した(30、31 ページ参照)。どこを探しても桑畑は消え、水田もほとんど見られない。極度に都市化した住宅地や諸施設の立地条件について、昔はそこがどのような場所であったかを調べ、地震、地盤沈下、水害などに対する防災上の問題を考えて下さい。

時空間探訪：若里一帯を大きく変えた前世紀末

昭和47年(1972年)の測量による地形図(1/25,000)

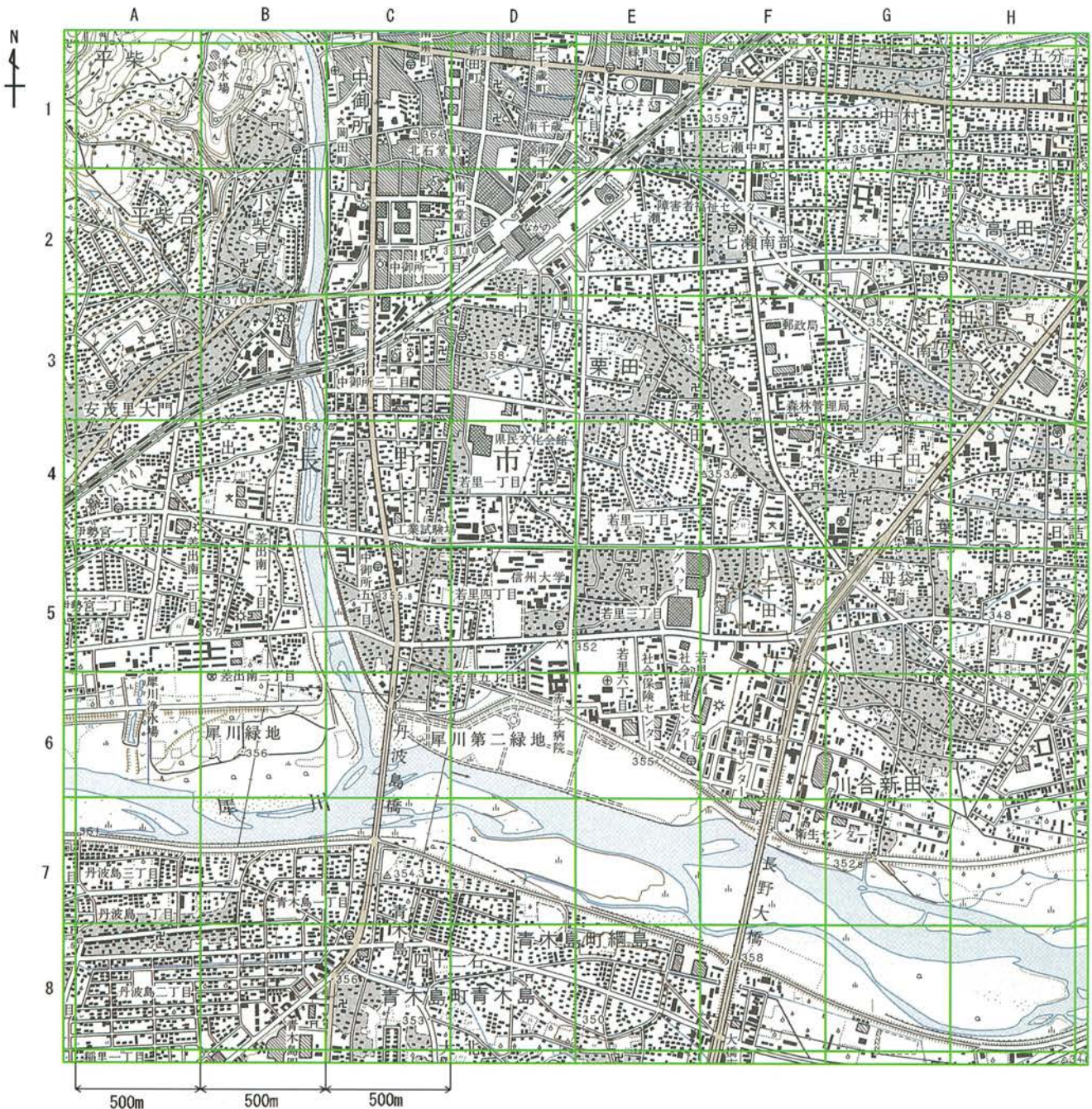


キャンパスを取り巻く若里地区の変容を、国土院の新旧の二万五千分の一地形図で観察しよう。左図はこの縮尺の地形図としては最も古いもので、昭和47年の測量で作られた。右図は近年のもので平成13年の測量で作られた。両者の間には29年ほどの時間差がある。この四半世紀余りの期間に若里一帯は大きく変わった。新旧の地形図で場所を比較するためのメッシュの大きさは500m平方で、区画線の中心は大学東北部の北市交差点である。キャンパスはメッシュD5の中にある。

左図 今(2010年)から数えれば38年昔の長野市の姿である。キャンパス北側のメッシュD4の大部分は長野県農業試験場の用地が占めている。大学の南東部には広大な鐘紡長野工場と社宅がある。また、グラウンドの体育館の東側には果樹園が広がっている。この場所は後年、大学が買収した。この当時の古い施設としては長野飛行場や、長野駅から地上を走る長野電鉄線がある。新しい施設としては長野大橋と長安橋(大学北側道路の延長で裾花川を渡る)が出現した。これによって道路が発達して都市化が進む状況を読み取ることができる。

長野冬季オリンピックを境にキャンパス周辺は一変

平成13年(2001年)の測量による地形図(1/25,000)



右図 まずキャンパスを見よう。大学が体育館の東側に土地を取得し、そこに広々とした信州大学生活協同組合の建物と学生課外活動施設の建物2棟ができた。かつての鐘紡の社宅は赤十字病院に、また工場は広大な駐車場と公共施設に、さらに長野飛行場[H6]の一部は学校となった。

長野冬季オリンピックの開催を目指してJR長野新幹線が開通。これにより長野駅も変身。駅東口の区画整理が行われ、そこから若里キャンパスの東を通る四車線道路が完成。この道路から500m東には水上競技の殿堂ビッグハットができた。そこから東西に延びる道路は中央分離帯付四車線道路で、キャンパス南門の前には30m幅の道路が東西に1km余り続き、道路沿いには美術館もできた。

長野県農業試験場の広大な農地[D4]の大部分は公園と化し、中には県民文化会館のほか図書館や放送局が立ち並ぶ。若里キャンパスの周辺は「文化の香りがする」と言えるような環境が整った。

左右の地形図を対比しながら各区画を観察してみよう。犀川の堤防の改修、新しい橋の出現、住宅地と化した農地など、これが是か非か、そこからさまざまな考察ができる。

信州大学工学部同窓会沿革史の編纂を終えて

信州大学工学部は六十年の還暦を迎えた。大学の前身である長野高等工業学校が設立された昭和18年から数えれば六十六年の星霜を経たことになる。いまや信州大学の中で最大の規模を誇る学部が発展し、同窓生の数は二万名に迫っている。

このたび、信州大学工学部六十周年記念事業の一環として、記念誌「信州大学工学部創立六十年のあゆみ」が刊行されることになった。この記念誌の中に、六十有余年にわたる我が同窓会の歩みを「信州大学工学部同窓会の沿革」と題して掲載することとなり、その編纂をお引き受けした。しかし実際に取り組んでみると浅学非才の身にとっては容易なことではなく、責任の重大さを痛感した。半世紀以上の歳月を経ると、過去の資料は入手困難なばかりか、当時を知る人々の記憶も薄らいでくる。そのような状況の中で、如何にして正確な記述ができるのかと自問自答しつつ、可能な限り複数の情報を集めて史実の整合性を確かめることに努めた。特に日時、場所、人名などにはかなりの注意を払ったが、完璧を期すことはむずかしい。今後は本誌を土台として、会員各位のご協力により、さらに充実した内容の沿革史を作り上げていくことが必要だと考える。

本誌の編纂に当たっては、大勢の同窓生の方々にお世話になった。市川誠氏(精機20)は終始懇切な監修をして下さり、創立当時の沢山の資料を提供していただいた。また記念誌「信州大学工学部創立六十年のあゆみ」編纂の推進役となった母校に在職中の清水保雄(機械45)・降旗建治(精密45)・榊和彦(機械61)の三氏からは、多くの資料の提供とご協力をいただいた。さらにまた昭和20年代卒業の大勢の同窓生の方々からは、貴重な資料の提供とともに数々のご教示をいただいた。そして柳沢武三郎(通信31)・神田鷹久(工化38)の両氏からは大所高所からの助言をいただいた。ここに、各位に深甚なる感謝を申し上げる次第である。

同窓生の皆様方には、本誌をお読みいただきまして、お気づきの点がありましたら、是非とも同窓会事務室まで文面にてご連絡を願います。本誌は同窓会としては初めての試作品であり、今後はこれを叩き台として、同窓生各位のお力添えによって修正を加えながら、史実を適確に反映した沿革史に仕上げたいと願っています。この趣旨を理解されまして今後ともよろしくご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお本誌の末尾には、時空間的な観察の目的で、国土地理院発行の新旧の地形図を加工したものを添付しました。解説文とともに、左右の地形図を対比しながらご覧ください。

平成 22 年 10 月
吉澤孝和(土木32)

信州大学工学部同窓会沿革史

平成 22 年 (2010 年) 10 月

監修および資料提供：市川誠(精密機械20) 編纂および執筆：吉澤孝和(土木32)

編集協力：清水保雄(機械45)・降旗建治(精密45)・榊和彦(機械61)

発行 信州大学工学部同窓会

電話 026-266-8209 (FAX 兼用)

E-mail : wakasat@shinshu-u.ac.jp

〒380-8553 長野市若里 4-17-1 信州大学工学部内

印刷・製本 信教印刷株式会社 〒381-0022 長野市大豆島東沖4321 電話026-222-5222 (代)

